

**学校法人 佑愛学園
愛知医療学院大学**

2025年度 授業評価レポート



2026/7/15

目次

■ 資料

- 1 学生による授業評価実施要項 … 3
- 2 学生による授業評価アンケートの実施要領 … 4

■ 授業評価レポート

【教養基礎科目】

- | | | | |
|----------------|------|----------------|------|
| 1 生命の科学 | … 8 | 30 生理学実習 | … 36 |
| 2 エネルギーのしくみ | … 9 | 31 運動学総論 | … 37 |
| 3 情報科学 | … 10 | 32 運動学 | … 38 |
| 4 基礎統計学 | … 11 | 33 運動生理学 | … 39 |
| 6 心理学基礎 | … 12 | 34 運動学実習 (PT) | … 40 |
| 7 人間関係論 | … 13 | 35 運動学実習 (OT) | … 41 |
| 8 倫理学 | … 14 | 36 人間発達学 | … 42 |
| 9 教育学 | … 15 | 37 病理学 | … 43 |
| 10 教育心理学 | … 16 | 38 神経症候学 | … 44 |
| 11 英語Ⅰ | … 17 | 39 臨床心理学 | … 45 |
| 12 英語Ⅱ | … 18 | 40 内科学 | … 46 |
| 13 英語Ⅲ | … 19 | 41 整形外科学 | … 47 |
| 14 健康科学 | … 20 | 42 神経症候学 | … 48 |
| 15 レクリエーション | … 21 | 43 精神医学 | … 49 |
| 16 生物と環境 | … 22 | 44 小児科学 | … 50 |
| 17 現代社会の理解 | … 23 | 45 リハビリテーション医学 | … 51 |
| 18 国際協力論 | … 24 | 46 医療安全学 | … 52 |
| 19 経営学 | … 25 | 47 臨床検査・画像診断学 | … 53 |
| 20 法学入門 | … 26 | 49 リハビリテーション概論 | … 54 |
| 21 社会福祉学 | … 27 | 51 障がい者スポーツ概論 | … 55 |
| 22 スタートアップセミナー | … 28 | | |
| 23 医療職教養演習(PT) | … 29 | | |
| 24 医療職教養演習(OT) | … 30 | | |

【専門支持科目】

- | | | | |
|----------|------|--|--|
| 25 解剖学Ⅰ | … 31 | | |
| 26 解剖学Ⅱ | … 32 | | |
| 27 解剖学実習 | … 33 | | |
| 28 生理学Ⅰ | … 34 | | |
| 29 生理学Ⅱ | … 35 | | |

【専門基幹科目】

- | | |
|------------------|------|
| 52 理学療法概論 | … 56 |
| 53 理学療法研究法Ⅰ | … 57 |
| 55 人体触察法実習 | … 58 |
| 57 運動療法総論 | … 59 |
| 61 検査測定法 | … 60 |
| 62 検査測定法実習 | … 61 |
| 65 神経筋障害理学療法治療学 | … 62 |
| 67 運動器系障害理学療法治療学 | … 63 |

【専門基幹科目】

73	老年期障害理学療法学	… 64
82	予防理学療法学	… 65
83	予防理学療法学実習	… 66
85	臨床実習Ⅰ（見学）PT	… 67
90	臨床セミナー(PT)	… 68
93	作業療法概論	… 69
94	臨床運動学	… 70
95	基礎作業学	… 71
96	基礎作業学実習	… 72
99	作業療法評価法	… 73
100	作業療法評価法実習Ⅰ	… 74
103	精神障害作業評価学	… 75
106	作業治療学理論	… 76
107	身体障害作業治療学Ⅰ	… 77
115	日常生活作業学Ⅰ	… 78
116	日常生活作業学Ⅱ	… 79
117	日常生活作業学実習	… 80
123	地域作業療法学	… 81
126	臨床実習Ⅰ（見学）OT	… 82
127	臨床実習Ⅱ（地域）OT	… 83
131	臨床セミナー(OT)	… 84

2025 年度 学生による授業評価実施要項

1. 実施目的

学生による授業評価アンケートは、教育運営委員会規程に基づいて行われ、アンケート結果を参考に授業の改善を図り、本学教育の質の一層の向上に資することを目的とする。

また、学生自身が授業への取り組みや学修行動を振り返り、確実に学修成果を修めることを目的とする。

2. 実施方法

今年度開講科目を対象として、授業毎にアンケートを実施する。

学生は、履修した科目のアンケートを Web アンケート方式 (infoClipper Web ポータル) で回答する。

3. アンケート内容

I 授業の内容について	2 問
II 授業の方法について	3 問
III 授業担当教員について	2 問
IV あなたの受講態度について	3 問
V あなたの学習態度について	1 問
VI この授業についてのあなたの満足度	1 問
VII ディプロマポリシー (卒業認定・学位授与に関する方針) の達成度	1 問
VIII 総合評価	2 問

4. 所要時間

5 分程度

5. 調査結果の集計

調査結果の集計は、IR・情報課が行う。

6. 調査結果の配布

実施した専任教員および非常勤講師には、集計結果ならびに設問別の平均値や回答割合を添えて配布する。

7. 実施結果の公表

個人集計結果を除き、全学集計結果を本学ホームページにて公開する。

2025 年度
愛知医療学院大学
教育運営委員会

学生の皆さんへ

「学生による授業評価アンケート」への協力をお願い

愛知医療学院大学
教育運営委員会

本学では「授業の質」を高めること、皆さん自身の学修行動を振り返り、確実に学修成果を修めることを目的として、授業科目毎に「学生による授業評価アンケート」を実施しています。このアンケートが皆さんの成績評価に影響を与えることはありませんので、安心して率直に回答してください。

皆さんの建設的な意見によって、本学の授業がより良いものになります。ご協力をお願いいたします。

<実施科目>

全科目・全クラス

※但し、科目の性質上、アンケートの設問を一部除外して実施する授業科目もある。

<実施時期>

原則として、各科目1回、授業最終日に実施します。

<実施方法>

履修した科目について、Web アンケート（infoClipper Web ポータル）方式で回答します。

※オムニバス形式の授業の場合、全体で一つの授業科目としてアンケートを実施します。

（オムニバス形式の授業のアンケートは、担当教員別には実施しません。）

<所要時間>

5分程度

〈授業評価アンケート〉

I 授業の内容について

1. 授業の内容は、あなたにとって、興味深いものでしたか
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そうは思わない
2. 授業の内容は、あなたにとって、理解しやすいものでしたか
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そうは思わない

II 授業の方法について

3. 授業の進み具合は適切でしたか
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そうは思わない
4. 授業中、教員の説明は、明瞭で聞き取りやすいものでしたか
※オンライン授業の場合、パソコン・スマートフォン・Web 環境の不具合によるものは除く
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そうは思わない
5. 授業内容の理解を促進する工夫がされていましたが（教科書や講義資料の適切な提示や ICT の効果的な使用など）
※ICT の使用とは、プロジェクターによるパワーポイントや動画の提示、コンピュータ機器の使用、デジタル教材、電子媒体でのレポート提出等を指します
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そうは思わない

III 授業担当教員について

6. 教員は学生の理解を深めるための工夫（小テスト、課題、グループワークなど）を十分にしていたと思いますか
①そう思う ②どちらかといえばそう思う ③あまりそう思わない ④そうは思わない
7. 教員はシラバスに記載の「学習到達目標」や「成績評価」について授業内で説明していましたか
①説明していた ②説明していなかった ③説明していたかどうか分からない

IV あなたの受講態度について

8. この授業に対してあなたは意欲的に参加しましたか
①意欲的に参加した ②どちらかといえば意欲的に参加した
③あまり意欲的に参加しなかった ④意欲的に参加しなかった
9. 理解できない点などを質問しましたか（複数選択可）
①授業中に授業担当者に質問した
②オフィスアワー等の授業外の時間を活用して授業担当者に質問した
③Google フォーム等の振り返りシートを活用して授業担当者に質問した
④授業担当者以外（学生・教員）に質問した
⑤授業担当者に質問していない
⑥質問が不要であった
10. シラバスに記載されている「学習到達目標」や「履修上の注意」を意識して学習に取り組みましたか
①取り組んだ ②どちらかといえば取り組んだ ③あまり取り組まなかった
④取り組まなかった ⑤学習到達目標や履修上の注意を理解していなかった

Vあなたの学習態度について

11. この授業1コマにつき、事前事後学習（授業外の学習（予習・復習・課題））としてどのくらいの時間をとりましたか（平均して算出してください）

※事前事後学習とは、授業担当教員から提示される課題も含まれます

- ①全くなし ②1時間未満 ③1－2時間 ④2－3時間 ⑤3－4時間 ⑥4時間以上

- 11-2. 上記で回答した学習時間を具体的に教えてください（半角数字、分単位で記載願います） 約____分

VIこの授業についてのあなたの満足度

12. この授業を受けて、知識修得（実習科目は技術習得も含む）に満足していますか

- ①満足している ②どちらかといえば満足している ③あまり満足していない
④満足していない

VIIディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）の達成度

13. この授業を受けて、ディプロマポリシーに基づく学習到達目標を達成することができましたか

- ①達成することができた ②どちらかといえば達成することができた
③あまり達成できなかった ④達成できなかった
⑤ディプロマポリシーや学習到達目標を理解していなかった

VIII総合評価

14. この授業を4段階で総合的に評価してください

- ①良い ②どちらかといえば良い ③どちらかといえば悪い ④悪い

15. この授業の良かった点や改善すべき点などを自由に書いてください

〈授業評価アンケート〉※設問除外パターン

Ⅳあなたの受講態度について

1. この授業に対してあなたは意欲的に参加しましたか
①意欲的に参加した ②どちらかといえば意欲的に参加した
③あまり意欲的に参加しなかった ④意欲的に参加しなかった
2. 理解できない点などを質問しましたか（複数選択可）
①授業中に授業担当者に質問した
②オフィスアワー等の授業外の時間を活用して授業担当者に質問した
③Google フォーム等の振り返りシートを活用して授業担当者に質問した
④授業担当者以外（学生・教員）に質問した
⑤授業担当者に質問していない
⑥質問が不要であった
3. シラバスに記載されている「学習到達目標」や「履修上の注意」を意識して学習に取り組みましたか
①取り組んだ ②どちらかといえば取り組んだ ③あまり取り組まなかった
④取り組まなかった ⑤学習到達目標や履修上の注意を理解していなかった

Ⅴあなたの学習態度について

4. この授業 1 コマにつき、事前事後学習（授業外の学習（予習・復習・課題））としてどのくらいの時間をとりましたか（平均して算出してください）

※事前事後学習とは、授業担当教員から提示される課題も含まれます

- ①全くなし ②1時間未満 ③1－2時間 ④2－3時間 ⑤3－4時間 ⑥4時間以上

- 4-2. 上記で回答した学習時間を具体的に教えてください（半角数字、分単位で記載願います） 約 ____ 分

Ⅵこの授業についてのあなたの満足度

5. この授業を受けて、知識修得（実習科目は技術習得も含む）に満足していますか
①満足している ②どちらかといえば満足している ③あまり満足していない
④満足していない

Ⅶディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針）の達成度

6. この授業を受けて、ディプロマポリシーに基づく学習到達目標を達成することができましたか
①達成することができた ②どちらかといえば達成することができた
③あまり達成できなかった ④達成できなかった
⑤ディプロマポリシーや学習到達目標を理解していなかった

Ⅷ総合評価

7. この授業を4段階で総合的に評価してください
①良い ②どちらかといえば良い ③どちらかといえば悪い ④悪い
8. この授業の良かった点や改善すべき点などを自由に書いてください

科目名

1.生命の科学

担当教員

森谷 和司

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

90 名

回答率

94.4%

回答者数

85 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

総合3.82であり、概ね良い評価であったと思われる。「興味」「理解」は高く評価され、専門科目ではないにもかかわらず、目的などを意識し、興味を持ち熱心に取り組んでいる学生が多数みられたことがわかった。

一方で、「事前事後学習時間」の平均が1.78という低い結果となった。講義において事前事後学習に取り組みやすい課題の設定や、実施状況の確認が必要であると感じている。

毎回の講義で、講義に関係ある生物(実物)や標本、関連書籍などを持参して回覧した。ネット社会の下では、いろいろな情報や写真・映像を手軽に見ることができる一方で、実物に直接触れる機会が減っていると感じる。ネットでは実際の大きさ、質感を体感することは難しいが、実物に触れることでその大きさや質感を肌で感じ、新たな発見につながる可能性が広がる。自由記載でも「実際の生物や標本に触れることができた」と記した学生が多く、大変喜ばしいことである。集計で良かった点については、今後も継続して実践していきたい。

◆今後に向けて

生物学は日々発展しており、遺伝子工学やiPS細胞などは実際の医療現場にも導入されつつある。このような中で、専門科目との関連性も考慮しつつ、本講義で扱う内容も検討を重ねていく必要があると思われる。特に「遺伝子(DNA)」や「発生(再生医療)」に関する分野はニュースや新聞記事を含め積極的に取り入れていきたい。また、自由記述にもあったが、講義の内容を生理学や解剖学の内容と関係づけていくことも必要である。この点については、学習内容がより効果的になるよう、講義内容の工夫を検討していきたい。

科目名

2.エネルギーのしくみ

担当教員

古池 観司

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

11 名

回答率

90.9%

回答者数

10 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

授業の内容・方法に関しては学生にとって概ね満足できるものであったようだが、否定的な回答も含まれている。授業の進め方や実施方法については改善の余地が多く、学習到達目標や履修上の注意・評価についての説明や周知徹底が不足していたという評価は重く受け止める必要がある。ディプロマポリシーや学習到達目標を理解していなかった、という学生が半数という結果は、第一回の講義でざっと説明しただけでは学生に理解されず、「講師自身が十分に説明した」つもりになっていただけであることを示している。折に触れ説明を繰り返すことが必要であろう。

また、学生の受講態度は概ね良好であると思っていたが、家庭学習をほとんどしていない、全くしていないという者がいたという点は残念である。課題の出し方、説明方法についても工夫が必要である。

◆今後に向けて

手探りで始めたこの講義であるが、学生にとって取っ掛かりやすくもそれでいて奥の深い教科書に出会えたことで、一応、半期の講義として締めくくることができた。全体の流れやペース配分については概ね今年度同様に進めてよいと思われる。ただ、専門科目との関連、特に、クエスチョンバンク等の問題集との関連まで講義に取り込む余裕がなかったのは残念であり、この学習がどこでどう生きるかを学生に具体的に実感させられれば、さらに意欲的に取り組めるようになるはずである。

また、上記の振り返りで述べたように、学生への動機付けとして、学習到達目標や履修上の注意・評価についての説明は、開講当初の説明だけでなく、繰り返し、毎回の講義の最初に行うとともに、その学習は何のために行うのか、何の役に立つのか、学生に確認しつつ進めていくことが必要である。

講義で取り入れた演示実験やパワーポイントによる説明・動画やシミュレーションの提示は、講義内容の理解を深めるのに効果的であり、改良を加えつつ継続していくことが望ましい。計画的に準備して臨んでいきたい。

科目名

3.情報科学

担当教員

田中 雅章

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

93 名

回答率

98.9%

回答者数

92 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

学生の集計データと自由意見を分析した結果、昨年度に引き続き、Officeの基本操作習得に対し高い満足度が得られた。特に、ほとんど情報処理演習経験がない学生が多かったことを踏まえると、本授業がパソコン操作の「スタートライン」となり、基礎力の底上げに大きく貢献できたことは評価に値する。昨年よりもプリントを増やし例の提示、教員による個別指導が学生の理解を助けたという意見は、この層の学生に有効な指導法であったことを示している。

一方で昨年よりもExcelの授業進度を遅くしたが、それでも授業の進度が速すぎるという意見が昨年度よりも多かった。これは、昨年以上に習熟度が低い学生が多く、指導者の予想以上に学生が復習しなかったことを十分に把握していなかったことを示唆している。そのため、授業に対する満足度が昨年よりも低下してしまった。

また、授業の進みが早いと感じられた原因は、学生が中学2年生から新型コロナの影響で情報処理演習をほとんど受講できなかった初心者だったことと理解に時間がかかるExcelの復習を怠ったことが考えられる。

◆今後に向けて

学生の意見を真摯に受け止め、次年度の情報リテラシー教育の改善点として、以下の点を進めていく。

学生のほとんどがパソコン操作の経験がないことを前提とし、授業の進行速度をより丁寧に調整する。口頭だけでなく、モニターの改善や説明資料を併用して視覚的に分かりやすい説明を徹底する。一つ一つの操作について、学生が完全に理解したことを確認して次へ進む体制を構築する。

次に、学生が質問しやすいように補助教員やTAを増員することで、個別の疑問にきめ細かく対応できるようにする。学生が復習をしてこないことを前提に復習時間の割合を増やす。さらに、学習内容の基礎固めを重視する。特に「Excelは難しい」という意見が複数あったことから、Excelの関数やグラフ作成はより時間をかけて丁寧に解説し、復習を充実させる。

これらの取り組みを通じて、学生が安心して情報リテラシーを学び、今後の学業や社会生活で自律的にパソコンを使いこなせるようになることを目指す。

科目名

4.基礎統計学

担当教員

山田 和政

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

95.9%

回答者数

70 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本授業の総合評価は3.49／4.00点であり、概ね良好な評価を得た。特にシラバスの明確さは高評価で、授業目標や学習内容が適切に伝わっていたと考えられる。授業方法に関する説明、進行、ICTの活用も安定した評価であった。一方で、学習の理解および学生満足度はやや低めであり、内容の難易度が影響した可能性がある。自由記述では「難しかった」という意見が複数みられ、統計やパソコン操作に対する苦手意識が学習負担につながっているものと推察する。同時に、「何度も説明してくれた」、「リフレクションペーパーでの疑問を次回の授業で再説明してもらえて解決できた」、「例題や演習問題で理解が深まった」といった肯定的意見も多く、復習の機会や個別対応が理解の促進に寄与したと考えられる。また、Excelを用いた実践的な統計処理は、卒業研究や将来の臨床活動に活かせる技能として評価されていた。一方で、リフレクションペーパーの提出状況における掲示方法に対する改善要望があった。

◆今後に向けて

本授業では、Excelを用いた実践的な統計処理、繰り返しの説明、リフレクションペーパーを活用した双方向的な授業展開が理解の促進に寄与していたことから、これらの取り組みについては今後も継続していく。特に、学生の疑問点を次回授業の冒頭で解説する方法や、個別に見回りながら支援する体制は、授業の意欲や理解を深めるのに効果的であり、続けていきたい。また、卒業研究や将来の臨床実践につながる内容である点も引き続き重視していく。一方で、授業内容が難しいとの意見を踏まえ、段階的に理解を積み重ねる授業形態を構築するとともに、学生が思考し、知識を整理する時間をしっかりと設けていきたい。また、パソコン操作に不安のある学生への補助資料の作成も検討する。また、リフレクションペーパーの提出状況における掲示方法については見直しを図る。これらの改善を通して、難易度を維持しつつも、より安心して学べる学習環境を整備していく。

科目名

6.心理学基礎

担当教員

松田 裕美

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

95 名

回答率

97.9%

回答者数

93 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

履修登録者95名中93名(97.9%)の集計データ、学生の自由記載の結果を以下に記載する。集計データ(授業内容、授業方法、教員の対応、学生の満足度)は、項目の平均が4段階評点の3.87であり肯定的な結果であった。また前年度の数値(3.89)と比較しても大きな変化は見られなかった。一方、知識修得の項目は3.76と他の項目と比較して低い値であり、今後に向けて授業内容の再検討が必要だと感じた。

学生の自由記述では、「資料を使ってインプットを行い、国試問題でアウトプットするというスタイルがいいと思いましたが、もう少し問題レベルを下げて欲しかったです。」「性格診断や、記憶力テストなど自分が実際に体験して覚えることが出来たので楽しかったです。」など知識に紐づく生活に即した具体例や実践を含む講義スタイルについて多くの記載が見られた。一方で、国家試験問題の難易度や資料の配布について改善を求める記載があったため、次年度に向け改善策を検討していく。

◆今後に向けて

集計データ、学生の自由記載の結果に記載した検討事項について以下に述べる。まず、知識修得の項目が他の項目と比較して低い値であった点について、毎授業後のGoogleフォームを用いた振り返りの中に知識整理の項目を追加し、自身学びを振り返る機会を作成することで学生が知識を得たことを可視化できる仕組みづくりを行う。

次に、国家試験問題の難易度については、授業内で国家試験問題の解説を行う時間を設けているが、授業スライドの中にも国家試験問題の知識を含めることで国家試験問題と授業内容がかみ合っていくよう工夫していく。資料の配布については、予習のため次回の授業資料を事前に配布していたことで予習がはかどったという意見もみられたが、一部の学生は当日に授業資料を持参できず、学習意欲が低下するといった現象がみられた。次年度以降はICTを活用し、授業資料を紙媒体とデータの双方を用いることで対応したいと考える。

科目名

7.人間関係論

担当教員

金子 幾之輔

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

93 名

回答率

98.9%

回答者数

92 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

評価の高かった項目は「授業担当教員」、「授業内容」であった。前者では、「先生が色々な話をしてくれたので、楽しく授業を受けることができた」等の授業への興味を示す見解が自由記載に見られた。この点について、小生は、「楽しい授業」を目標の一つにしており、その成果の一部を示すものとして有意義な見解といえる。

後者については、「人間関係という私たちが実際に考えやすい問題についての授業であり、グループワークや発表があったため周りの人の具体的な話を聞くことができて内容が理解しやすく楽しかった」等のグループワークやプレゼンテーションの効果を示す見解が自由記載に多く見られた。これは、体験学習、グループワーク、プレゼンテーション等のアクティブラーニングの成果によるものといえよう。

一方、低く評価された項目は、「授業方法」、「事前事後学習」であった。前者の主因は、自由記載から鑑みると、「授業のスライドの進むのが速すぎてメモできないときがあった」、「授業回数ごとに進み具合が違っていた」など「授業進行の度合い」にあると考えられる。

後者の「事前事後学習」については、ガイダンスや授業で説明を繰り返した結果、昨年度以前の学生よりも改善されたが、まだ全般的に学習時間が少なかったことから、さらに改善する必要がある。

◆今後に向けて

「楽しい授業」を拡大するために多角的な観点から話題の精選化を図る。また、体験学習、グループワーク、プレゼンテーション等のアクティブラーニングの機会をできる限り多く設定し、より多くの学生が楽しく主体的に学習できるように配慮する。

「授業進行の度合い」では、授業回数ごとに進行の度合いが違わないように計画する。スライドの展開については、学生の筆記状況に合わせて進めるように配慮するが、学生もスライドに記載された内容を全部筆記するのではなく、要点のみを筆記するように努めてほしい。

「事前事後学習」については、学生が各自のノートに「事前事後学習」の欄を作成し、毎回、授業内容を記載するように指導強化するなどして改善を図る方針である。

科目名

8.倫理学

担当教員

後藤 謙治

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

51 名

回答率

90.2%

回答者数

46 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

「興味」、「理解」、「進行」の3項目は3.7以上、「説明」、「ICT」の2項目は3.8以上の評価であり、授業内容及び授業方法については、一定の評価を得られたものとする。また、「理解促進」及び「シラバス」も、同程度の評価であり、シラバスに記載した通りの授業の進行が概ねできたと考える。

「知識習得」、「総合」についても、4.0に近づくよう、学生の習熟度・満足度を上げていきたい。

自由記述において、「作業療法士になるにあたって、意識しておくべき知識をお話していただきました。弁護士の方なのに医療職の立場に立ってもらい、有難かった」との回答を得られたことは、担当講師として嬉しく思う。

また、アクティブラーニングの一環として取り入れたグループワークも、学生同士の関係を深め、多様な視点から課題に取り組んでほしいという講師の狙いを好意的に受け止めてもらえたものとする。

今後、プロフェッションとして社会に巣立っていく学生たちであるという前提で、担当講師が実際に直面した悩ましい事例等を題材にした設問で議論してもらったが、各々の将来を見据えて真剣に授業に取り組んでもらえたようであり、担当した甲斐があった。

◆今後に向けて

グループディスカッションやグループ発表、それに向けた資料作成等、アクティブラーニングの機会を確保する取組みは継続していきたい。その上で、各テーマごとの予復習をしやすいような資料展開や、学生が興味・関心を持てるトピックも随時取り入れながら、授業内容の改善を図っていきたい。

選択科目であることから、できるだけ学生の負担にならないように、授業内の時間及び配布資料で完結できるような講義構成を意識した。グループ課題や小テストを組み合わせることで、時間外の学習時間を確保してくれる学生も多く、その点は今後も継続したい。更に学習を深められるような情報提供や、質問しやすいオフィスアワーづくりにも取り組んでいきたい。

ひとりでも多くの学生が、高い倫理観を備えたプロフェッションとして社会で広く活躍していくことを願ってやまない。

科目名

9.教育学

担当教員

森田 耕治

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

90.4%

回答者数

66 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

教育学講義に対する学生のアンケート結果を見ると次のことが分かる。

- 1) グループワークが多く意見交換の機会が多かったことに満足している。
- 2) 授業の使用教材が、新版「世界の学校」および「ウキペディア」であったことに当惑観が強かった。
- 3) 日本と比較しつつ、世界の各国の教育観と教育制度を学べたことは満足している。
- 4) レポートの作成方法と評価基準について、事前に具体的に示してほしいかった。
- 5) 授業にグループワークを取り入れるのは良いが、その目的および評価基準を明確にしてほしいかった。

◆今後に向けて

今回の講義に対する学生の反応や授業者の視点・立場から、今後に向けて次のような観点が必要である。

- 1) まず第一に、世界の「教育学の発達史」をコンパクトに纏めた教材(教科書)があれば、採用する。
- 2) ウィキペディア等については、その内容を吟味しつつ、学生の理解しやすさを第一に考えて採用する。
- 3) 世界の学校教育を比較・検討することは、学生の教育観を広く育てることに繋がるので、積極的に取り入れる。
- 4) 医療分野に応用できる教育観・職業観・人生観を磨くため「グループワークの機会」を授業の中に設定する。
- 5) 将来、医療分野以外の活動が求められる場合に備えて、様々なメンバーとの意見交換を積極的に取り入れる。

科目名

10.教育心理学

担当教員

牧 謙治

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

40 名

回答率

92.5%

回答者数

37 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

授業に関する検討結果はは次のとおりである。

一点目として、学生及び職員の協力によって円滑な授業が実施できたことに感謝したい。担当者の変更と時間割の変更というアクシデントにもかかわらず、それを受け入れ受講した学生、制約の多いところで時間割を編成していただいた担当者、授業開始前のアクシデントにも迅速に対応していただいた担当者と、どれが欠けても授業は成り立たなかった。

二点目として、教科書を購入させている以上、それに則った内容で進めるという方針で展開した。そのため、授業の進行速度についていくのが困難な学生もあったようである。理由としては学生の筆記速度が遅いことと、語彙の少なさ、漢字が分からないなどがあげられる。高校でガイダンスをさせていただいた際に、タブレットでメモを取っている生徒さんを散見する。高校によっては学習で使用するプリント類を生徒に送信して、データで学習させている場合もある。語彙の少なさ、漢字の知らなさの原因の1つと考えられるが時代の流れと実用性を鑑みて考察したい。

三点目は、予習及び自習についてである。復習する習慣をつけるために小テストとまとめテストを実施した。またレポートも提出させた。しっかり取り組んで学習した学生と、そうでない学生の差が激しい。内容と量について考えて対応する。

◆今後に向けて

まずは継続することについて記す。一点目は教科書を使用した授業展開である。教科書を中心とした内容により、書籍を読ませることをさせる。スマホ等で画面越しにしか文章を見ないので、短い行の文に慣れてしまっているため、教科書を読みこませることで経験を積ませたい。二点目は配布するプリントを穴埋めにするすることで、学生の活動する時間を増やす。三点目は、自分の頭を働かせる「アクティブラーニング」を実施する。授業実施者からの問いに、自分で考えて答えを出す方式でワークシートに記入させる。また、毎回の授業で振り返りシートに記入させ、授業の取り組みや理解度を自ら点検させる。

次に、改善することについて記す。一点目は授業の進行速度についてである。「速い」という声がアンケートにも見られた。その反面、「緊張感が持てた」という声もあった。授業のスピードは学生の「作業速度」と「緊張感」のバランスが大切なので、学生の「作業能力」を高める方法を実施する。二点目は自主学習の時間を増やすことである。小テストやレポートの実施方法や内容を工夫する。ただし、教養科目であるということ、しっかり意識して実施したい。三点目は学生の質問回数を増やすことである。現在も振り返りシートで質問をする学生も多かったので方法を考えたい。

科目名	11.英語 I
-----	---------

担当教員	山森 孝彦
------	-------

専攻・配当年次	PT・OT 1年
回答率	97.9%

履修登録者数	94 名
回答者数	92 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

集計データでは全ての項目が概ね高評価であり総合評価も3.8であった。特に全回答の83人中の82人がシラバスの説明が十分になされていたと答えていたことが確認できた。

また、自由記述に書かれていた内容を階層分析すると次のような結果であった。

1. 発音・映像教材【21件】例「あいうえおフォニックスなどの動画のおかげで単語の発音が詳しく分かった」
2. ペアワーク・交流活動【21件】例「ペアワークやグループワークが多くて授業に取り組みやすかった」
3. 小テスト・暗唱テスト【13件】例「毎回の小テストのおかげで日々少しずつ単語を覚えることができた」
4. 授業の楽しさ・先生の熱意【18件】例「とにかく先生の熱意があり、朝から元気に授業を受ける気にさせて貰えた」
5. 医療英語・将来活用【6件】例「医療系の英単語を覚えられて今後のリハビリで活かせると思った」
6. 改善要望・レベル向上【4件】例「もう少しレベルを上げて、文法の構成についてなどももっと詳しく学びたい」

◆今後に向けて

本授業では、英語に苦手意識をもつ学生や英語嫌いの学生も積極的に参加できるよう、発音教材や映像、ペアワークや小テストを組み合わせ、楽しみながら学習できる工夫を重ねてきた。その結果、多くの学生が「わかりやすい」「楽しく学べた」と肯定的に捉え、将来の専門職に役立つ英語を意識する契機となった。一方で、英語を得意とする学生からは「あいうえおフォニックスは自分には不要」「もっと文法や語彙を深めたい」など、基礎を超えた学習への要望も示された。これらの声を踏まえ、後期は94名全体を総合成績で中級クラス48名と初級クラス46名に分け、授業前半の60分は全員共通の教材を扱い、後半30分は習熟度別に展開する。中級クラスでは語彙増強や文法・読解を深める発展的演習を、初級クラスでは基礎内容をさらに噛み砕き、ペアやゲーム形式で実践的に定着させる活動を行うことで、多様な学習ニーズに応える授業へと発展させたい。なおこの習熟度別の授業展開と自分がどちらのクラスに入りそうかは、学生全員に事前にメールで知らせてあり、期日までに、申し出れば本人の希望のクラスに入れるような配慮もしてある。

科目名	12.英語Ⅱ
-----	--------

担当教員	山森 孝彦
------	-------

専攻・配当年次	PT・OT 1年
回答率	94.4%

履修登録者数	90 名
回答者数	85 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

今回の英語Ⅱにおいても、集計結果のレーダーチャートは全方向にバランスよく広がっており、前期英語Ⅰと同様に授業全体の満足度は概ね良好であった。自由記述では、ペアワークやグループ活動に関する肯定的な意見が多く、席替えや活動形式の工夫が交流促進と心理的ハードルの低減に寄与していることが確認できた。また、小テストによる語彙や表現の反復定着への評価も継続して見られ、段階的な積み上げ型の授業設計が有効に機能していたと考えられる。さらに、医療英語との関連づけや動画・プリント教材への言及もあり、臨床志向の内容提示と複数モダリティによる提示方法が理解のしやすさに寄与したと判断される。加えて、12月に実施した診察室英会話のグループスキット活動に関しては、4人1組で英文を創作し役割分担して演じる過程を通じ、協働的に学びながら重要表現を自分の言葉として定着できたという意見も見られ、実践的活動の有効性が示唆された。

◆今後に向けて

今後は、前期から継続して効果が確認されているペア・グループ活動、小テストによる定着支援、最重要表現の焦点化といった基本方針を維持・発展させる方針である。一方で、自由記述では授業の楽しさや分かりやすさへの評価が多かったことから、学習成果の可視化をさらに強化し、到達度を学生自身が実感できる仕組みを補強する必要があると考える。具体的には、小テスト結果の振り返り機会の体系化や、臨床場面を想定した短時間スキット活動の継続的導入を検討する。また、教科書やYoutube動画から精選したPT・OTのための診察室英会話表現を整理し、簡潔で覚えやすく使いやすい表現集を作成し、それを反復活用することで誰もが暗記可能な教材開発にも取り組みたい。基礎重視の路線を維持しつつ、意欲の高い学生には発展課題も提示し、全体の学習水準の底上げを図る方針である。

科目名	13.英語Ⅲ
-----	--------

担当教員	山森 孝彦
------	-------

専攻・配当年次	PT・OT 2年	履修登録者数	3 名
回答率	100.0%	回答者数	3 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本年度の医療英語Ⅲは受講者が3名であり、いずれの学生も授業評価アンケートの全項目において満点を付していた。すなわち「授業内容の興味深さ」「理解のしやすさ」「進捗の適切さ」「説明の明瞭さ」「教材提示やICT活用の工夫」「理解を深める仕組み」「シラバスに基づく到達目標や評価基準の説明」「知識修得の満足度」「総合評価」のいずれにおいても満点評価であった。自由記述においても、「受講者が少人数で個別指導のように学べた」「楽しかった」との記述が寄せられ、学生3名全員が肯定的に受け止めていることが確認できた。授業内容の妥当性、進行方法、学生対応のいずれも高く評価され、少人数ならではの密度ある学習機会が提供されたことが明確となった。

◆今後に向けて

本授業では、3名という少人数を活かし、希望を聞きながら題材を選び、個別的な質問対応や英語クイズ、音読や単語暗記ゲーム、Rehab Karutaなど多様な活動を実施した。さらに試験前には出題者の視点に立ち予想問題を作成させることで、全範囲を俯瞰して復習できる工夫を行った。また、医療英単語を語源的に分析し、英文法構造を明示することで、表面的な理解にとどまらない力を養うことを意図した。一方で、教材準備に時間を要し、英語Ⅰとの兼ね合いで前日深夜に完成することが多く、効率化の必要性が課題として残った。今後は、学生の反応を踏まえつつも教材開発の持続可能性を確保し、より計画的かつ効率的に授業を運営することを目指したい。

科目名

14.健康科学

担当教員

松村 仁実、渡邊 豊明、横山 剛、宮津 真寿美、高橋 圭

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

72 名

回答率

86.1%

回答者数

62 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

集計データから、各項目は3.5以上であった。また、学生の取り組みとしては、「意欲的に」、「どちらかといえば意欲的」に取り組んでいた回答者は90%を超えていた。また、到達目標についても8割強の学生が達成していると回答した。事前事後学習は30分程度の学生の割合が多い。まったく時間をとっていない学生が3割強であった。

自由記述では、オムニバスにより多くの教員から様々な視点があること学べたこと、グループワークの実施、体を動かす(特にけん玉)ことに対して肯定的な意見が多くみられた。一部授業スライドと配布プリントの違いによりわかりづらいとの指摘も見られた。

授業としては到達目標を学生が意識し、意欲的に取り組むことができる授業を実施することができたといえる。

◆今後に向けて

全体の構成としては、大きく変える必要はないと考える。オムニバスで担当する教員それぞれの範囲でのブラッシュアップを継続していければと考える。

科目名	15.レクリエーション
-----	-------------

担当教員	加藤 真夕美
------	--------

専攻・配当年次	PT・OT 1年
---------	----------

履修登録者数	45 名
--------	------

回答率	100.0%
-----	--------

回答者数	45 名
------	------

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

すべての項目で平均3.67～4.00/4の間におさまっており、バランスのとれた良い評価であった。授業到達目標は、「理解していなかった」2名を除く43名の学生が「達成できた」「どちらかといえば達成できた」と回答した。授業中に質問できた学生は33.3%であった。多くの学生にとって、目的を意識しながら学べる時間だったようである。

自由記載では、「楽しかった」との記述が非常に多かった。学生主導のアクティブラーニング方式の授業には「受講者全員と関わりながら、レクリエーションの役割や大勢の人を動かす方法を学べたことが特に良かった」「自分たちでレクリエーションを考え、発表することで自分達にはどのような力が足りないのか知ることが出来た。今後に非常に活かせる科目だと思った」、専門職教育としての視点からは「コミュニケーション、チーム力の大切さや患者さんを第一に考えることの大事さについて理解できてよかった」等との肯定的な意見が挙げられた。全体的に、教員の授業構成の意図が伝わったようである。

◆今後に向けて

本授業では、くじ引きで偶然一緒になったグループメンバーと、15時間を共に活動する。他のグループメンバーに楽しんでもらうためのレクリエーションを計画し、実施し、振り返るという一連の流れを、教員の助言のもと行う、完全なアクティブラーニング形式の授業である。PT・OT合同クラスでの開催であり、入学して間もなく開講する授業であるため、初めは緊張の面持ちだった学生もすぐに打ち解けグループごとの色を作り出していくことは、教員にとっても楽しい要素である。

グループワークを主体とすることの難点は、グループ全員が同一の得点となってしまうことである。グループへの貢献度の差を数値化することは難しい。そこで今年度初の試みとして、計画書のやり直しを、個人かつ自主課題として提示した。忙しい学業の中、約半数の学生がチャレンジし、より良いものを完成させかつ得点を上乘せした。次年度はさらに多くの学生がチャレンジしてくれるような仕組みを整えたい。

科目名

16.生物と環境

担当教員

森谷 和司

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

87 名

回答率

94.3%

回答者数

82 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

「授業の内容」や「授業の方法」に関する各質問項目はすべて3.75以上となり、高く評価された。特に「説明」「進行」「総合」の項目では3.80という高い評価を得ており、学生の満足度はおおむね良好であったといえる。また、シラバスへの意識に関する評価も3.96と非常に高かった。これは、授業内で科目の目標や達成度を確認する時間を設けた成果と考えている。

一方、課題として残ったのは「事前事後学習」の評価である。授業内でその必要性を説いたものの、学生に十分な理解や定着を促すまでには至らず、今後の改善が必要であることが示された。

自由記述においては、講義内で多様な生物や標本を扱ったことに対し、「スライドや実物が使われていて分かりやすかった」「実験を交えたことで理解しやすかった」「毎回の課題が良かった」といった前向きな回答が多く寄せられた。担当講師として、これらの工夫が学生の理解を助けたことを喜ばしく受け止めている。

◆今後に向けて

「授業の内容」および「授業の方法」については一定の評価が得られたため、今後も現在の取り組みを継続していく。特に好評であった生物や標本の提示についてはさらに内容を充実させ、生物と環境の問題をより身近に感じられる授業を目指したい。

また、課題となった予習・復習の不足については、授業の開始時や終了時に要点を分かりやすく伝えることで、学生が自習に取り組みやすい環境を整えていく。生物学は暗記中心の学習に陥りやすいため、単なる知識の習得に留まらず、学生自らが考え、深く理解できるような授業を展開していきたい。

科目名

17.現代社会の理解

担当教員

蔵本 紗知

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

66 名

回答率

100.0%

回答者数

66 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

全ての項目で評価が3以上となり、学生から一定の評価を得られたと考えられる。特に、「シラバス」が3.95、「進行」が3.68、「説明」が3.61という結果だった。一方、「理解促進」は3.11にとどまり、他の項目と比べて改善が必要であることが示された。

学生の自由記載には、講義内でさまざまな社会問題を扱ったことについて、「現代の社会で何が起きているのか、ニュースをあまり見ない自分でも知ることができた」「社会の課題がわかったり、多方面から見る大切さなどを学ぶことができた」といった意見が寄せられた。資料の活用に関しては、「新聞などを読まないためそういった物にも触れる機会があった点が良かった」とのコメントがあった。さらに、コメントシートを使ったフィードバックについては、「毎回ある振り返りシートで先生と間接的に話せているような感じがしてよかった」「自分の意見だけでなく他人はどう思っているのかを知れてとても良かった」と評価された。新聞記事の活用やコメントシートを通じたフィードバックにより、本講義の目的である、現代社会への理解の向上がある程度達成されたと考えられる。

◆今後に向けて

「シラバス」「進行」「説明」については、学生から一定の評価を得られたため、今後も継続して取り組んでいきたい。特に、新聞記事などの資料をさらに充実させることで、社会問題をより身近に感じられる講義を目指したい。また、学生から評価されたコメントシートのフィードバックでは、多様な見方や意見を取り上げ、多角的な視点を育てることに一層努めたい。他の項目と比べて改善が必要な「理解促進」については、課題やグループワークの実施を通じて対応したい。これまで講義内では、学生の理解を深めるためにコメントシートの記述を求めてきたが、今後は学生がより主体的に学べる形式を取り入れ、さらなる理解促進を図りたいと考えている。

これらの取り組みを通じて、学生が講義の到達目標である「身近な社会問題への理解・思考・興味・関心」を深められるよう、講義内容を一層改善していきたい。

科目名

18.国際協力論

担当教員

濱田 光佑

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

18 名

回答率

94.4%

回答者数

17 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

当科目の総合点は、3.82点(4点満点)と比較的高い評価となった。各学生の出席状況も良好で、比較的に集中して受講し、活発な意見交換が実施された。特にシラバスに沿った講義進行、科目採点等は学生へ定期的に相互確認し講義を進行したため、学生からの評価も4.0点(4点満点)と高かったと推察される。講義に関しては、グループワークを多く取り入れ、ゲーム形式の課題等を導入することで、幅広い国際課題をより身近な問題として主観的に捉えられるように配慮を行った。また、各講義では学生間の意見交換の時間を設け学生同士で課題に対する理解度の向上、意見集約を促した。それによって各学生共に比較的に共通意識をもった課題への考察を行うことができたと考えられる。

◆今後に向けて

当科目は比較的に高い評価であったことから、次年度以降も事業の進行方法はグループワーク主体の今年度の方法を継続していく。集計結果からは、1. 興味、13. 知識習得が3.53点(4点満点)と低値を示していることから、幅広い国際問題の中でも特にリハビリテーション専門職と関連の深い医療・保健分野に関する内容に関してはさらに発展的な議論や意見交換がなされるよう改善していく。また、当科目では、社会人、医療従事者として教養や考えの幅を広げるため、社会学、心理学、人類学の視点も多く取り入れて講義を構成した。学生の自由記述からも新しい視点を学べたとの意見があり多くの学生から受け入れられていたと評価できる。この点に関しては、次年度以降も継続し科目履修者の知見の拡大を促していきたい。

科目名	19.経営学
-----	--------

担当教員	安藤 信雄
------	-------

専攻・配当年次	PT・OT 2年
---------	----------

履修登録者数	9 名
--------	-----

回答率	100.0%
-----	--------

回答者数	9 名
------	-----

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

履修生9名全員から回答を得られた。学生の意欲的参加について、「意欲的」「どちらかといえば意欲的」が9割近くである。自由記述回答では、4件回答があり全てで「良かった、ためになった、おもしろかった」との肯定的回答である。よって意欲的學生には満足 of いく授業内容を提供できたと言える。

レーダーチャートの結果では、7.シラバスが満点4を得られた。これはシラバスに沿った授業進行をしたこと、またシラバスを活用した予習を毎回促したことによる結果であると考えられる。しかし授業の予習時間について30分が4名、「なし」が5名であった。

◆今後に向けて

結果に記載したように、授業の予習時間で、4名が「なし」と答えている。これは全体の半分近くに当たる。この点で改善が必要である。具体的には、予習を提出させて点数を付与するなど予習のインセンティブを与える工夫を検討したい。

成績の高得点への偏在で改善が必要と考える。しかし単に試験の難易度を上げるだけでは、不合格者が増える結果になることが予想される。よってまず学習意欲の低い学生の意欲を高める工夫を行い、加えて試験の難易度を上げる工夫が必要であろう。例えば、学生の身近な事例を挙げ、授業内容との関係をまとめさせるなどの工夫を検討している。また、ビデオを活用して学習意欲を高めるように工夫したが、さらにビデオ視聴の前に調べておくことさらに理解が進むであろう事項を予習課題として出すなど、学習のための予習を次年度以降の授業で実施したい。

科目名

20.法学入門

担当教員

森澤 史郎、笹尾 菜穂子、田中 伸明

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

32 名

回答率

93.8%

回答者数

30 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本科目では、法が、私たちの生活に密接に関わっていることを理解してもらうため、ただ教科書を解説するという形式ではなく、近年の法改正やニュース等で話題となっている事件、講師が携わっている事件を取り上げる形式で講義を行った。

また、学生が、将来、法的な問題に直面した際に、自分で状況を把握し判断する能力を培うきっかけをつくることを目的に、誰もが知っておくべき一般的な法律知識だけでなく、理学療法士及び作業療法士が知っておくべき具体的法律知識もできるだけ多く扱うようにした。

授業評価アンケートからは、学生が、本科目を足がかりとして、興味をもって授業に取り組んだこと、授業内容の理解には一定の課題があるものの、全体として知識促進に役立てたことが窺われ、講師の目標も相当程度、実現できたものとする。学生が概ね興味関心を持って受講してくれたことが分かり、講師としても嬉しい回答であった。

◆今後に向けて

引き続き、学生が、将来、法的な問題に直面した際に、自分で状況を把握し判断する能力を培うきっかけをつくることを目的に、誰もが知っておくべき一般的な法律知識だけでなく、理学療法士及び作業療法士が知っておくべき具体的法律知識もできるだけ多く扱うようにしたい。

また、法律が難解で縁遠いことは否めないため、分かり易い授業にするよう努めるとともに、最新の法改正やニュースとなっている事件の紹介、講師が関わっている案件のアップデートに努める予定である。

さらに、本科目は、複数人が講義を担当している関係上、授業終了後に疑問がでてきても、次回授業で質疑応答できない事態も生じうるため、講師間での連携を深めていきたい。

科目名

21.社会福祉学

担当教員

伊藤 正明

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

94 名

回答率

96.8%

回答者数

91 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

2025年度は前期月曜午前1～2コマ、PT・OT合同クラスで集計データの総合評価は4段階3.74であった。質問項目に対する学生の評価としておおむね良好だったといえる。

自由記述の内容から「グループワーク」「映像・動画」が授業理解および参加に効果的と感じてもらえたこと、漫画やアニメを用いた解説が理解しやすかったことが伺えた。一方で小テストの設問には課題があったことがわかる。

また今年度もPT・OT学生が混ざるようグループ編成し、授業開始時にアイスブレイク要素のあるワークと授業中にペアまたはグループワークを行っている。これは授業内容につながるワークであり、かつ前期終了以後の学生生活における資源としてもらえたらと考える。

◆今後に向けて

事前事後学習用のレポート課題を検討し、学生がアウトプットと省察ができる機会を設けたいと考えている。これを可能であればグループ毎にピアスーパービジョン形式で実施することで、勉強の方法やコツ、レポートの書き方理解について相補できるつながりをつくってもらいたい。

映像教材・漫画の活用、PT・OT混成によるグループワークについては継続し、社会福祉学をより身近なものにしていこうと考えている。社会福祉・生活課題に関する映像は最新のものを吟味し、視聴した学生の自己覚知と専門職としての価値観について確立していくきっかけとなるような設問をともに考えていけるよう工夫していきたい。

科目名	22.スタートアップセミナー		
担当教員	山田 和政、林 尊弘、加藤 真弓、松村 仁実、宮津 真寿美、臼井 晴信、木村 菜穂子、齊藤 誠、山田 南欧美、濱田 光佑、藤本 大介、岩井 和子、廣渡 洋史、横山 剛、渡邊 豊明、加藤 真夕美、清水 一輝、外倉 由之、松田 裕美		
専攻・配当年次	PT・OT 1年	履修登録者数	94 名
回答率	97.9%	回答者数	92 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

すべての項目で平均3.61～4.00/4の間におさまっており、バランスのとれた良い評価であった。授業到達目標は、「理解していなかった」6名を除く86名の学生が「達成できた」「どちらかといえば達成できた」と回答した。多くの学生にとって、目的を意識しながら学べる時間だったようである。一方で、59.4%の学生が「質問が不要であった」と回答した。演習科目における質問の意義が十分に理解されていなかったようである。

自由記載では、「様々な人と交流ができ、入学当初からいろんなタイミングでコミュニケーション能力を養うことができるきっかけが沢山あった点が非常に良かった」「清須についてや大学生活に慣れるような授業形態だったので良かった」と、本授業の主目的を理解した記載が複数あった。本授業で身についたことは「チームワークや関係性」「コミュニケーション能力」が多く挙げられ、「色々な視点でこの職業のことを知れた」との回答もあった。一方で、「グループのメンバーがやる気がなくて一部の人だけでやらなくてはいけなくなってしまった」「予定がギリギリでキツかった」との意見が挙げられ、次年度に向けての課題となった。

◆今後に向けて

本授業はチームビルディング、本学の歴史に関すること、学習スキルやキャリア育成に関すること、学内利用方法、教員へのインタビュー、清須市の制度などに関すること、など多様な内容で構成している。授業方法は、グループワークを複数回取り入れた演習形式である。大学生としての学びの基礎作り(初年次教育)としての位置づけであり、様々な教員が関わることを意識して授業を構成した。

自由記載で挙げられていたグループメンバー間の働き度合いの差や、スケジュールの余裕のなさについては、グループワークの進捗状況やメンバーの役割を教員が把握し管理したり、グループワークを授業時間内で完結できるような構成にしたりと工夫していきたいと考えている。

科目名

23.医療職教養演習（PT）

担当教員

林 尊弘、松村 仁実

専攻・配当年次

PT 1年

履修登録者数

61 名

回答率

100.0%

回答者数

61 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

授業評価は概ね良好（説明の明瞭さ（設問4）3.89、到達目標・評価の説明（設問7）4.00）で、総合評価（3.84）や満足度（3.79）は安定して高かった。説明の明瞭さや、到達目標・評価基準の提示は肯定的に受け止められている。一方、到達目標を意識した学習や事前事後学習は十分とはいえず、学習時間は1時間未満にとどまる受講者が多かった。質問行動は「授業内で解決した／質問の必要を感じなかった」という回答が目立ち、積極的な質問は限定的であった。

自由記述では、グループワークの有効性、説明の分かりやすさ、配布資料の見やすさへの評価が中心で、論文読解課題については導入時期の前倒しや手引き・見本の明確化を求める意見が挙げられた。

以上より、教材と進行の質は確保されているが、目標の可視化と自主学習の道筋の具体化に改善余地があると考えられる。

◆今後に向けて

現行のグループワーク中心の設計、明瞭な口頭説明、紙資料の配布は継続していく。その上で、到達目標の意識化（設問10）を高めるため、各回スライド冒頭に「本講義の目標」を明示し、講義毎の終わりに自己評価チェックなどを組み込む。学習時間の確保に向け、課題に分量や内容の見直しを図ることも検討する。論文読解は今年度と同様に講義の後半に導入し、検索手順・抄読テンプレート・見本を提示していく、学生が興味をもって論文読解が進められるよう資料の見直しも検討する。

科目名	24.医療職教養演習（OT）
-----	----------------

担当教員	横山 剛
------	------

専攻・配当年次	OT 1年	履修登録者数	32 名
回答率	100.0%	回答者数	32 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

概ね学生の評価は高い授業であったと思われる。丸暗記することが学習することだと思っていたり、そのようなことをしていた人にとっては斬新な授業であったかもしれない。それが「様々な大切なことに気づくことができるような内容であった」「自分達で考えるところもあって深く学ぶことができた」といった自由記載に現れていると考えている。自身が変わり成長していくことを目指して、「自身をよりよく知ること」「信頼関係」といったことをテーマにして演習を続けてきた結果、本学での学びに対する学生の学習意欲が高まったと思われる授業になったと思う。「何も言うことがないぐらいいい授業でした」という感想に現れていると思われる。目指してきたことは、この授業で完結することではいことを覚えて、今後も学生にかかわっていこうと思う。

◆今後に向けて

学習したことによって自身がどのように変わっていったのかについて認識できるような授業を展開していこうと思う。毎回の講義に加えて、それまでの自身と今の自身とこれからの自身について、参加者が安心して語り合えるグループを行っていきたいと考える。

科目名	25.解剖学 I
-----	----------

担当教員	中野 隆		
専攻・配当年次	PT・OT 1年	履修登録者数	96 名
回答率	97.9%	回答者数	94 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

臨床医学の理解に必要な臨床解剖学的知識、国試にも頻繁に出題される必須事項だけではなく、医学用語の語源や人物像などの医学史、人体構造と進化の過程の関連などに興味を示す学生が多いことを、アンケート結果および振り返りシートの記載から読み取ることが出来る。医学は学際領域の学問であり、大学は専門領域だけではなく幅広い知識と技能を学ぶ場である。

「ホワイトボードに何を書いているのか見えづらい」、「ホワイトボードの文字の色が判りにくい」、「マイクのハウリングが多い」などについては、「挙手をする」あるいは「講義後のオフィスアワーに質問する」ように指示してある。90名以上の学生に（階段教室ではない）平坦な教室で講義をするため、講師側の対応には制限がある。学生が自ら行動することが求められる。

◆今後に向けて

上記の結果を考慮し、臨床医学や医学史、系統発生学などの知識をさらに取り入れ、学生の学習意欲向上に務めたい。

一方、学生の学習意欲を高めるには、非常勤講師だけでは対応困難なため、課題への取り組み方など常勤教員との連携を計りたい。

科目名

26.解剖学Ⅱ

担当教員

中野 隆

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

92 名

回答率

93.5%

回答者数

86 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

「授業評価」,「振り返りシート」および「課題(練習問題、MISSION)」の記載内容からも、学生間の学習意欲に著しい差があることが明確である。また、「授業評価」の自由記載欄からも明らかなように、理学療法専攻学生と作業療法専攻学生間においても学習意欲に差が認められる。学習意欲が高く成績優秀な学生は、「教科書的な内容」だけではなく、一般的な解剖学の範疇に留まらない「より高度な内容」、例えば疾患に関する臨床医学的知識や「医学史」など学際領域の知識も求めている。一方、医学に対する興味が薄く、練習問題の正解のみに興味を示す学生への対応も避けることはできない。講義を聴かない、見ない、書かない学生に対して、非常勤講師が講義中に対応するには限界がある。したがって、全学生に対して均一の教育方針を執ることは、困難かつ非現実的であろう。

◆今後に向けて

講義内容は全学生に対して均一であるが、課題等は学生によって異なる対応をとることが可能であろう。「振り返りシート」に記された優良な質問に対しては、classroomにおいて「教科書的な内容」を超える「より高度で科学的根拠を重視した回答」で答えている。今後は、成績優秀者に対しては、「課題(練習問題)を免除する」、練習問題に代わって「学術的文献の検索方法を教示する」、「総説や学術論文を紹介する」等、さらに学習意欲を高める方策を考慮する。一方、他の学生に対しては、より基本的な内容を反復して問う課題や小テストを課すことが必須と考える。これは非常勤講師単独では不可能であり、学年担任・副担任を中心とする常勤教員との連携を密にして協力を仰ぎたい。

科目名

27.解剖学実習

担当教員

木村 菜穂子、清島 大資

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

93 名

回答率

88.2%

回答者数

82 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

アンケートの集計結果より、「授業内容」「授業方法」「満足度」「総合」いずれの項目も4点満点中3.5点以上であり、大きな問題はなかったと判断できる。また、アンケートに回答した学生のすべてが「意欲的に/どちらかといえば意欲的に」授業に参加したと自己評価をしていた。自由記述でも「グループ学習」の効果を挙げている学生が多く、「分からないことも協力して考えられた」「よいアウトプットの機会となった」などの評価であった。一方グループ学習については「取り組まない人がいると、時間内に課題が終わらない」という意見もあった。

もう一点、自由記述で多かったのが、解剖見学実習についてであった。これまで1年生で標本見学は実施していたものの、諸事情から今年はこれまで2年生で実施していた実習形式であったため心配もあったが、多くの学生が真摯に取り組み、この経験がとても貴重なものであったこと、実際に見て・触れて・感じるこのと重要性を理解していたことは意義深い成果であった。今後もその機会を確保していきたいと思う。

◆今後に向けて

本科目は実習科目であることから、講義ではなく自己＋グループ学習を中心に進めており、それが多くの学生に積極的に受け入れられたということから、今後も継続していきたいと考える。また、昨年の意見で多かったグループ人数が多いことへの意見から、今年はグループ数を増やし、1グループの人数を若干減少させたが、「やらない人がグループにいと終わらない」という意見が少数あったことからこれ以上の減少はせず行いたいと思う。また、「自分たちで課題に取り組むのは良い勉強になるが、最終的に正解が分からないことがあった」という記載も数件あった。昨年からの改善点として、毎回実施するグループ課題の中から作成した問題にグループで回答してもらい、採点して返却するようにして、間違いに気づけるようにした。また、授業中に不明点を質問しやすいよう、教員が巡回していたが、それでは不十分と感じる学生もいたようで、学生の理解が難しい点については授業中に全体レクチャーを実施するなどの工夫を検討したいと考える。

科目名

28.生理学 I

担当教員

長谷川 昇

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

94 名

回答率

94.7%

回答者数

89 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

- ・授業内容(平均3.7)、授業方法(平均3.7)、学生の満足度(3.6)はおおむね良好な結果であった。
- ・すべての項目中、点数が高い項目は、最大(4.0)のシラバスに次いで、興味についての項目(3.8)であった。さらに興味を深められるように、今後も継続して工夫していく。最小を示した項目(3.7)は、教員の「理解促進」の項目であった。さらにわかりやすいよう工夫を行う。
- ・自由記述の中で、「わかりやすかった」、「興味深かった」、「薬につながる講義内容は興味が持てた」、などの+の要因が多く記載されていたことから、前項目の結果とはやや矛盾が生じているが、授業の理解度はおおむね良好と考えられる。
- ・全体の流れを初回に提示したこと、毎回最初の復習、質問シート、中間テストの実施など、授業の進め方については、おおむね良好であったと考えられる。
- ・「かみ砕いた説明がわかりやすい」、「図を使って、要点を絞った説明がわかりやすかった」などの感想を持つ学生がいたことは、授業レベルが学生のニーズに合致していたと考えられる。今後、この授業が引き金になり、関連分野の学習が進むことを期待している。

◆今後に向けて

- ・本授業では、学生が授業内容を聞きながら、自身にとって必要な情報を取捨選択し、効率的にメモを取る能力を養うことを目標の1つとしている。その結果として、授業への関心が高まり、予習・復習の時間が増加し、質問の機会も自然と多くなるような授業構成を意識していく。学生が主体的に学びに向かえるよう、さらに、内容の精選と展開の工夫を重ねていく。
- ・本授業では、単に知識を習得することにとどまらず、実際の臨床現場において複数の知識を柔軟に組み合わせ、薬物治療の方針についても、自ら考える力を養うことを目標の1つとしている。さらに、学生の思考の幅を広げ、薬物治療に対する興味・関心を深められるよう、授業内容や展開に工夫を凝らしていく。知識の応用力と探究心を育む授業設計を心がける。
- ・2年次の生理学実習において、学生が実際に体験する内容の理解を深めるために、生理学の知識の周知・徹底を図り、効果的な学びにつながるよう授業を構成していく。
- ・本授業では、解剖学などの関連科目や薬の作用点との関連性を意識しながら内容を構成することで、学生が知識を有機的に結びつけ、より深い理解につながるよう工夫していく。複数の領域を横断的に学ぶことで、臨床応用への視点も養えるような授業設計を心がけていく。
- ・講義の進行スピードを意識的に抑え、より多くの学生が内容を理解できるよう配慮していく。

科目名

29.生理学Ⅱ

担当教員

長谷川 昇

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

90 名

回答率

91.1%

回答者数

82 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

- ・授業内容(平均3.68)、授業方法(平均3.55)、学生の満足度(3.60)はおおむね良好な結果であった。
- ・すべての項目中、最大(3.74)は、興味についての項目であった。さらに興味を深められるように、今後も継続して工夫していく。最小を示した項目(3.34)は、理解の項目であった。さらにわかりやすいよう工夫を行う。
- ・自由記述の中で、「わかりやすかった」、「説明が丁寧でわかりやすかった」、「教科書以外の補足説明が学習の幅を広げた」などの+の要因が多く記載されていたことから、前項目の結果とはやや矛盾が生じているが、授業の理解度はおおむね良好と考えられる。
- ・全体の流れを初回に提示したこと、質問しやすい雰囲気、中間テストの実施など、授業の進め方については、おおむね良好であったと考えられる。
- ・「授業がわかりやすく大切なところを線を引いて示したのでわかりやすかった」、「図を使った説明がわかりやすかった」などの感想を持つ学生がいたことは、授業レベルが学生のニーズに合致していたと考えられる。今後、この授業が引き金になり、関連分野の学習が進むことを期待している。

◆今後に向けて

- ・授業を聞きながら、自分に必要なことを瞬時に取捨選択して素早くメモできる能力が身につくことを目標とし、その結果、さらに関心を持て、予習・復習の時間や質問が増えるような授業の組み立てをする。
- ・単に知識を身につけるだけでなく、現場で知識を組み合わせる薬物治療の方針を考えられるよう、さらに、考え方の幅や興味が広がるような授業の組み立てをする。
- ・解剖学などの関連科目や薬の作用点と結びつけ、さらに理解が深まるよう工夫する。
- ・講義の進行スピードを抑え、少しでも多くの学生の理解度を上げるような組み立てをする。

科目名

30.生理学実習

担当教員

長谷川 昇、清水 一輝、宮津 真寿美、外倉 由之、松村 仁実

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

94.5%

回答者数

69 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

- ・授業内容(平均3.4)、授業方法(平均3.4)、学生の満足度(3.4)はおおむね良好な結果であった。
- ・すべての項目中、点数が高い項目は、最大(3.7)のシラバスに次いで、興味についての項目(3.5)であった。さらに興味を深められるように、今後も継続して工夫していく。最小を示した項目(3.3)は、「理解」の項目であった。さらにわかりやすいよう工夫を行う。
- ・自由記述の中で、「グループで行ったことがよかった」、「生理学の講義の内容について理解を深めることができた」、「考察する力がついた」などの+の要因が多く記載されていたことから、授業の理解度はおおむね良好と考えられる。
- ・反面、1グループ内の学生間の学力差があるため、「グループ編成の変更」についての意見があったが、理解できるような説明を行いたいと考える。
- ・評価について、「積極的に実習を行う人と手を動かさない人が混在している」が、評価が班単位なので違和感を持つ学生がいたことは、個人での点数化も考慮すべきと考える。
- ・「時間内に終わらない」という指摘があったが、班全員で協力して、スムーズに進められるような進行を心がけることを徹底していく。

◆今後に向けて

- ・次年度においても、授業の進行は本年度と同様の形式を継続する。特に、学生が予習に十分な時間を確保できるよう配慮し、授業初回に実習講義を実施し、各実習項目の内容と目的について周知を行う。これにより、学生が主体的に学習に取り組みやすい環境を整え、授業の理解度向上を図っていく。
- ・グループ構成においては、各学生の知識レベルに応じた役割分担を徹底することで、学習効果の最大化を図ることが可能となる。特に、十分な知識を有する学生には、「自身の知識を整理し、他者に教授することで班をまとめていく能力」を養う機会が提供できる。これにより、協働的な学びの中でリーダーシップやコミュニケーション能力の向上が可能であることも指摘し、実習点に加点することも考慮する。
- ・グループ内での作業状況に温度差が生じることから、個人評価を希望する意見も見受けられた。これを踏まえ、今後は「実習内容に関する試験」や、項目を定めた「個人での実習レポートの提出」など、個人の学習成果を適切に評価できる仕組みの導入を検討する。これにより、学生一人ひとりの理解度や取り組みをより正確に把握し、学習意欲の向上につなげる。
- ・「時間内に実習が終わらないことがあった」との指摘があった。これに対し、今後は予習を十分に行い、実習前にあらかじめ実習手順を確認したうえで、各自の作業分担を明確にしておくことを徹底する。実習当日は、スムーズな進行を心がけることで、限られた時間内での効率的な学習を実現できるよう努める。

科目名

31.運動学総論

担当教員

齊藤 誠

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

90 名

回答率

90.0%

回答者数

81 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本授業では、事前に講義動画を配信し、授業時間は小テストと解説、重要事項の補足説明に充てる反転授業形式を採用した。学生アンケートでは、「動画で繰り返し復習できた」「小テストにより理解が深まった」など肯定的な意見が多く、集計結果においても概ね良好な評価を得たことから、本形式は一定の学修効果を上げていると考えられる。一方で、「映像と対面を分けた方がよい」との意見もあり、学習スタイルの個人差への配慮の必要性が示唆された。総じて、主体的に取り組んだ学生にとっては効果的な学修環境であったが、視聴や事前準備の質により理解度に差が生じる可能性も確認された。

◆今後に向けて

今後も、繰り返し視聴可能な動画配信と、対面時間を演習や確認に活用する反転授業形式は継続する。これは、理解の定着や自律的学習を促す有効な方法であると判断している。一方で、動画視聴のみでは理解が不十分となる学生への支援として、重要ポイントの要約資料の提示や、対面時の確認問題の段階的構成などを検討する。また、事前学習の到達度を可視化する簡易チェックを導入し、学修状況を把握したうえで補足説明を行うなど、個々の理解度に応じた支援を強化することで、全体の基礎力向上を図る。

科目名

32.運動学

担当教員

松田 文浩

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

89.0%

回答者数

65 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

今回の運動学の授業では、身体運動のイメージを形成することを中心に据え、繰り返しその重要性を伝えることに努めた。授業の構成としては、毎回必ず時間をとって前回内容の復習をするとともに、小テストによって学習の区切りごとに理解を確認できるよう工夫した。その結果、授業評価アンケートからは、多くの学生が授業に興味を持ち、また授業が比較的わかりやすかったと受け止めていることが明らかとなった。さらに、模型やアプリケーションを活用して身体運動のイメージ化を補助したことが、理解促進に有効であったと評価されている。一方で、事前事後学習の時間については6割以上が1時間未満と回答しており、知識やイメージを十分に定着させるための学習時間が十分とはいえない状況である。また、そのことと直接の関係は不明ながら、一部の学生が内容を難しいと感じたとの回答もみられた。今後は授業内での工夫を継続しつつ、学生が主体的に学習を深められる仕組みづくりを検討していきたい。

◆今後に向けて

今後に向けては、これまでの授業の取り組みを継続しつつ、いくつかの改善を図りたいと考えている。まず、授業のポイントをより明確に示すことで、学生が学習の焦点を把握しやすくし、理解を一層深められるようにしたい。そのために、配布資料についても工夫を加え、どの部分を重要な知識としてメモすべきかがわかるように提示することで、学習効率の向上を図る予定である。また、今回のアンケート結果から事前事後学習の時間が十分に確保されていないことが明らかとなったため、その重要性を授業内外でさらに強調して伝える必要がある。併せて、学生が主体的に学習へ取り組めるよう、学習課題や小テストを活用し、自ら理解度を確認できる仕組みを整えたい。これらの改善を通して、授業のわかりやすさや理解の定着を一層高め、学生にとって有意義な学びの場を提供できるよう努めていきたい。

科目名

33.運動生理学

担当教員

臼井 晴信

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

91.8%

回答者数

67 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

集計データの学生からの評価は全ての項目で3.5点を超えており、講義の構成や内容に問題はなかったと考えられる。その中で「知識習得」に関する項目が最も低かった。一方、「説明」の項目は点数が高く、学生の自由記述にも「説明がわかりやすかった」、「理解しやすい工夫がされていた」との記載が多かった。以上を踏まえると、教授方法が悪かったというよりも講義内容が難しかったのだと考えられる。特に生理学的な内容の理解は難しかったかもしれない。

◆今後に向けて

講義内容が難しかった点について、両専攻を対象にした講義であり、国家試験出題レベルの理解を目標としている。そのためこれ以上講義内容を易しくすることは不適切であると思われる。よって、講義内容は変更せず、理解を促せるよう働きかける。学生からの記述でも、講義後にレポートを作成し、その解説を次回の講義で行った点と、生理学の内容を小テストで確認した点が高く評価されている。それらの講義構成を継続しながら、より理解を促せるように丁寧に講義を行いたいと思う。一方、講義外での学修時間はあまり多くなかった。講義外で理解を促せるような取り組みを行うとよいかもしれない。過負荷にならない程度に検討したい。

科目名

34.運動学実習（PT）

担当教員

宮津 真寿美、濱田 光佑

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

97.7%

回答者数

42 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

すべての項目で3.50点以上あり、総合点が3.67点だった。学生からの評価は良好であった。

自由記載では、よかった点として、実習で知識が深まったこと、グループで協力してとりくめたこと、レポート作成や発表の方法が学べたこと、考える力の必要性・正確な測定の重要性がわかったこと、発表のあとの小テストで知識が定着できたこと、などをあげている学生が多数いる。一方で、レポートが大変だった、考察が難しかったなどの意見もある。

◆今後に向けて

本科目は、運動学的な実習課題を行う中で、基礎知識を調べ、実習の結果から考え、まとめ、説明することができるようになることを目標にしている。実習課題と発表は、グループで協力して行うが、結果と考察は各自でまとめレポートを作成した。学生それぞれが、本科目の学習目標の必要性がわかっており、高評価につながったのではないかと考える。また、課題の発表後、発表学生が作成した小テストも好評だった。

授業形態のベースは、そのまま来年度も継続する。1年次の授業で学んだはずの文献の示し方を理解していない学生が多かったので、レポート作成の説明の際に具体的に説明する。

科目名

35.運動学実習（OT）

担当教員

清水 一輝、外倉 由之

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

29 名

回答率

89.7%

回答者数

26 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

集計データの結果、各項目の平均値は概ね3.5以上と良い評価であった。特に「興味」、「理解」、「シラバス」は高い評価を得られた。自由記述では、グループワークや実技を通じた体験的学習への肯定的意見が多く、発表を通じて理解が深まったとの記載が多かった。さらに、文献からの学びや教科書通りにいかない体験からの学びの発展など、運動学からの発展的な思考につながるような授業の構成となっていたことがうかがえる。実際の体験と理論の学習を繰り返す学習過程が、学生の理解を深め、主体的な学びを促進していたと考えられる。その一方で、事前事後学習の時間が全くなしという学生が4名であったことから、グループの中でも学生によって学習への取り組み状況の差があったことがうかがえる。

◆今後に向けて

今後は、良い評価であったグループ学習や体験的学習の強みは継続し、学生一人ひとりの学習への取り組みをさらに高めるように工夫をしたい。特に、事前事後学習を行っていない学生が一定数いたことから、課題学習への具体的な取り組み方をより明確にし、授業時間外の学習と授業の各課題とのつながりを組み立てていきたい。また、グループワークにおいても、個々の役割や到達目標を具体化することで、学習への主体的参加を促していきたい。グループで他者と協調する過程も重要な学びであると捉え、意見交換やグループ内での相互支援がより活発に行われるような仕組みを整えていきたい。体験を通して学びを深めるという授業の特色を活かしながら、グループでの体験学習の質の向上を図っていく。

科目名

36.人間発達学

担当教員

内藤 通孝

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

90 名

回答率

91.1%

回答者数

82 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

95%以上(「どちらかといえば」を含む)の学生が目標を意識して意欲的に取り組み、DPに基づく到達目標を達成できたと回答している。事前事後学習については、半数以上の学生が「全くなし」と回答しているが、毎回授業後にGoogle Classroomで「確認問題」に取り組んだので、最低限の復習は行ったと考えられる。

自由記述では、毎回授業後のGoogle Classroomでの「確認問題」や最終回授業での解説がよかったが22名あった。毎回の授業はパワーポイントスライドを用いて行ったが、スライドがわかりやすい8名、Google Classroomでの予習用事前配信と復習用事後配信がよかったとの意見が14名あった。また、授業の説明がわかりやすかった(14名)など、全般的には好評価を得た。一方、各1名のみだが、「進みが早すぎて追いつけない」、「騒いでいる人や違う席にいる人を注意してほしい」との意見があった。今後は授業を進めるスピードに留意するとともに、私語や座席の勝手な移動などに対し、より厳正に注意する。

本学着任後初めての「人間発達学」講義で不慣れなこともあり、シラバスに記載のように毎回の授業を單元ごとに区切りよく実施できなかった面もあるが、総じて学生に満足してもらえる授業を行うことができた。

◆今後に向けて

全般的に高評価であったので、基本的に以下の方式を継続する。

- ①Google Classroomを用いて、事前に「予習用スライド」、授業後に「復習用スライド」を配布する。さらに、最終的に誤り等の必要な修正・補足をした「確定版」を配布し、以後いつでも「人間発達学」の復習や見直しができ、関連する科目の学習にも役立つようにする。
- ②スライドはわかりやすいとの評価であったので、パワーポイントを用いた授業を継続する。
- ③毎回の授業終了後に、Google Classroomで〇×式の「確認問題」を送信し、その日の授業の理解度を各自が確認できるようにする。
- ④最終の授業で、確認問題の中でとくに誤答が多く、補足説明が必要と思われる事項について重点的に解説する。
- ⑤私語や勝手な座席移動(座席指定)など、授業中に他の学生に迷惑となる行為に対しては厳正に対処する。

科目名

37.病理学

担当教員

下郷 和雄

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

92 名

回答率

93.5%

回答者数

86 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

将来の専門職への直接的な関連が見えにくい中で、病理学の面白さ、論理的思考の面白さの解説に重きを置いて講義を組み立てた。しかしながら、内容の面白さや時にその高度差から、十分に理解が追いついてこない学生もあるように見受けられる。学生の学習の進捗と医学生物学の理解度を知るために、過去の標準的な問題を用いる旨を講義中で知らせた上で小試験を試みたが、講義の進捗とは無関係な問題群であるためか、偏りなく評価すると難しい試験に属するものと思われる。しかし、試験問題そのものの妥当性、正当性を新作問題で確保することはリスクが高いことは周知のことで、この点からも、国家試験の過去問題を用いることには一定の意義があろう。一方で成績分布で高位得点者が正規分布を超えて存在することは、むしろ低位得点者の学習不足を反映しているとも言えるだろう。科目を理解しようとする動機づけと講義内容のマッチングが必ずしも良好でないと言える。

◆今後に向けて

学生の自由記載の内容に関して：教科書の進行を大筋に、特に大切な項目について詳細な事項をレジュメに示し、細かな解説を行ったことを歓迎する意見と、それと講義時の強調点との違いが気になって分かりにくくなったという意見は昨年と同傾向だが、概して好意的な意見が多かった。また、「講義内容にあった試験問題を」との意見も散見された。成績評価との関連の有無が興味のあるところではあるが、今後は出題源をより明確に説明して万遍なく学習するよう促したい。授業時間の制限からどうしても意を尽くせないところが残ることは学生の意見からも示されている。これについては、当面は復習を主体に補うよう促すことにする。また、講義中で提示する臨床画像をより鮮明に見せるため、部屋を暗くすることが「眠気を誘う」との意見も3-4件見られたので、来年度は少し明るい状態で講義を試みる。

科目名

38.公衆衛生学

担当教員

横尾 和久

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

86.3%

回答者数

63 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

今年度より事前配布資料を紙の媒体からPDFファイル形式に変更し、Google Classroomで配信するようにした。学生も、予習や復習に際し問題なく活用できたようである。

毎回レポートの提出を課しているが、講義内容の理解を促すテーマと捉えてくれているようで、過度の負担となる分量では無いと考えられる。

個々の患者や疾病を対象とする臨床医学とは異なり、公衆衛生学は社会現象としての疾患を理解しようとする学問である。したがって一般人の関心も高く新聞報道などマスコミで取り上げられる機会が多い。講義ではつとめて公衆衛生に関連する新聞記事などを渉猟し、医療人として知っておくべき知識として学生に伝えるようにした。学生も公衆衛生学のこの特徴を8回の講義を通じて理解してくれたものと思う。この領域に興味を抱いてくれた学生も複数名みられる。

◆今後に向けて

PDFファイルによる講義資料の配布は、著作権に抵触せぬよう留意しながら今後とも継続していきたい。印刷が大変という学生がいたが、プリントアウトするのではなくファイルを直接パソコンで閲覧するという習慣を促したい。毎回課しているレポートについても、次年度以降も続ける予定である。

講義内容についても大きな改変は予定しないが、公衆衛生学が対象とする社会医学の現象(衛生統計、医療統計、自然現象と疾病の関係など)は時事刻々と変化していくものである。常にアップデートしていく方針である。

グループワーク形式についての提案があり、一部のレポートのテーマで採用を検討する。

将来医療人として生きていく上で社会医学分野の知識が必要不可欠なものであるということを、引き続き様々な手段を用いて伝えていきたい。

科目名

39.臨床心理学

担当教員

金子 幾之輔

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

94.5%

回答者数

69 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

評価の高かった項目は、「授業担当教員」であった。とくに、最初のガイダンスの授業で、「シラバス」に記載した「学習到達目標」や「成績評価」等の内容を具体的に説明するなどして周知徹底を図ったことによって「シラバス」の評価が4.00と高くなったといえよう。

「学生の理解促進」では、「演習の授業もあったので心理士がどのようなものなのかとてもわかりやすかったです。先生の体験談も用いて授業していたので、興味深かったです。」「実際に技法を体験することで臨床に活かしやすくなった」等の記載が多かった。この点については、体験学習やグループワーク等のアクティブラーニングの成果によるものと考えられる。

一方、低く評価された項目は、「授業内容」、「学生の満足度」、「事前事後学習」であった。

「授業内容」の理解と「学生の満足度」については、「スライドに多くのことが書いてあるのに切り替わるのが速いため理解するのが難しい」、「スライドの文字が多くて大変でした」等の記載があった。この点から鑑みると、当該項目が低く評価された主因は「スライドの内容と展開の仕方」にあると推察される。

「事前事後学習」については、ガイダンスや授業で説明を繰り返したが、まだ、全般的に学習時間が少なかったことから、さらに改善する必要がある。

◆今後に向けて

「シラバス」については、前述のように最初のガイダンスの授業で学生に周知徹底する。また、体験学習、グループワーク、プレゼンテーション等のアクティブラーニングの機会をできる限り多く設定し、より多くの学生が楽しく主体的に学習できるように配慮する。

「スライドの内容と展開の仕方」では、スライドの内容を簡素化したり、補足資料を配布したりする。また、スライドの展開については、学生の筆記状況に合わせて進めるように配慮するが、学生もスライドに記載された内容を全部筆記するのではなく、要点のみを筆記するように努めてほしい。

「事前事後学習」については、学生が各自のノートに「事前事後学習」の欄を作成し、毎回、授業内容を記載するように一層、指導強化するなどして改善を図る方針である。

科目名	40.内科学
-----	--------

担当教員	内藤 通孝
------	-------

専攻・配当年次	PT・OT 2年
---------	----------

履修登録者数	73 名
--------	------

回答率	89.0%
-----	-------

回答者数	65 名
------	------

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

90～95%（「どちらかといえば」を含む）の学生が目標を意識して意欲的に取り組み、DPに基づく到達目標を達成できたと回答している。事前事後学習については、約1/3の学生が「全くなし」と回答しているが、毎回授業後にGoogle Classroomで「確認問題」に取り組んだので、最低限の復習は行ったと考えられる。

自由記述では、毎回授業後のGoogle Classroomでの「確認問題」や最終回授業での「誤答の多い問題」の解説がよかったが22名あった。毎回の授業はパワーポイントスライドを用いて行ったが、スライドがわかりやすい、Google Classroomでの予習用事前配信と復習用事後配信がよかったとの意見が13名あった。また、授業の説明がわかりやすかった（14名）など、全般的には好評価であった。

本学着任後初めての講義で不慣れなこともあり、シラバスに記載のように毎回の授業を單元ごとに区切りよく実施できず遅れ気味になった面もあるが、総じて学生に満足してもらえる授業を行うことができた。

◆今後に向けて

高評価であった以下の方式を継続する。

- ①Google Classroomを用いて、事前に「予習用スライド」、授業後に「復習用スライド」を配布する。さらに、最終的に誤り等の必要な修正・補足をした「確定版」を配布し、以後いつでも「内科学」の復習や見直しができ、関連する科目の学習にも役立つようにする。
- ②スライドはわかりやすいとの評価であったので、パワーポイントを用いた授業を継続する。
- ③毎回の授業終了後に、Google Classroomで〇×式の「確認問題」を送信し、その日の授業の理解度を各自が確認できるようにする。
- ④最終の授業で、確認問題の中で誤答が多く、補足説明が必要と思われる事項について詳しく解説する。

少数ではあるが、授業の途中段階で小テストを実施してはとの意見があった。この点はシラバスに明記していないので、今回は「確認問題」の提出に期限を設けなかったが、授業終了後速やかに復習をするように意識づけを行うことが重要であると考え、次回からは確認問題に2週間の提出期限を設け、平常点の評価（10点満点）とする。

科目名

41.整形外科学

担当教員

長谷川 幸治

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

91.8%

回答者数

67 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

1.アンケート結果報告

学生によるアンケート結果は非常に有用である。設問12の学習時間についての回答は次のようになった。全くなしは35%、30分38%で60分は15%、60分より多いは8%、その他5%となった。予習や復習の学習時間を増やしてほしい。

2.授業に対する意見

授業内容は46%から好評の意見だった。活舌が悪いが5%あった。整形外科は内容が多岐にわたるために多すぎ項目を話した。また早口で話していることが多かった。今後はハッキリと発声することでわかりやすくしたい。

◆今後に向けて

整形外科の講義を担当して他大学を含め8年となる。内容は膨大であり、時間内では項目を限定しないと網羅できなくなるほど膨大になっている。今年1年を踏まえより解りやすく理解しやすい整形外科講義とする予定である。

整形外科の効果的な教育をするために現在も実際に使用するギプスや包帯治療、創縫合を学生に体験してもらうことにしている。人工骨頭、創外固定の器械をの供覧や手術のスライド供覧もしている。講義内容と一致したより良い内容になるように務めたい。また海外の先進的な治療やリハビリテーションなども逐次紹介する。

国家試験に合格するための講義ではなく、運動器疾患や高次脳機能に対するフレイルロコモに対する理解を深める講義にしたいと考えている。

科目名

42.神経症候学

担当教員

石井 文康

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

94.5%

回答者数

69 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

難解で苦手意識となることの多い神経症候学において、集計データのaverage 3.78～であったことは学生皆の毎回の講義での頑張りであり、今後も学ぶことに対して興味・達成感が持てるように陰ながら応援をして行きたい。

自由記載の内容については「クイズ形式で楽しくかつ覚えやすかった」「最初から最後まで楽しく学ぶことができてとても良かったです」「こんなに時間が早く進む授業は今までに無いくらい授業が楽しいです」「講義の最初に先週まで何をやったかの復習時間が設けられていて、他の科目よりも内容が頭に残りやすかった」「膨大な量全てをやらせるのではなく、簡潔にこれだけまずは覚えてという講義の進め方だったため他の講義よりも簡単に覚えることが出来たのがすごく良かった」など、肯定的意見であった。楽しく学ぶことは快適な脳の働きとなり、最適な授業環境となっていると思われる。

◆今後に向けて

今後に向けて(2年後の国家試験に向けて)

講義最終日に2025年第60回理学療法士国家試験の中の神経症候学関連問題10問:2025PT問題午前12・15・25・32・43・44・46・48、2025PT問題午後29・46を行い、結果は10問中正答数の平均は5.9となり、国家試験合格レベルの6割近くの理解度にて、大変称賛すべき結果である。2年後の国家試験に際しては神経症候学関連問題の苦手意識は解消していると思われる。

神経系の講義は理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・看護師養成大学等で行っている中で、本学の学生さんの学ぶ姿勢は最も良好であり、この学修風景については学生皆さんも誇りと自信として思っていただければ幸いである。

科目名	43.精神医学
-----	---------

担当教員	古井 景
------	------

専攻・配当年次	PT・OT 2年	履修登録者数	73 名
回答率	94.5%	回答者数	69 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

土曜日、5限・3回での集中講義で、学生の皆様方に負担をおかけし、申しわけ無く思っており、今後の課題と受け止めている。

受講者の皆様方には、興味、関心を持って授業に参加していただけた様で、良かった。授業の内容に関しても、概ね許容していただき、また、楽しんで学んでいたことが出来たようで良かった。

試験に関しては、「試験時間が少なかった」との記述が見られたが、AとSが95.9%と高割合を示したことを考慮すると、次年度は試験問題の難易度を再検討する必要があると考える。

◆今後に向けて

集中講義の日程に関して、可能な範囲で調整したいと思う。

授業内容に関しては、従来同様、学生諸君が精神疾患の症状及びその罹患者を理解しやすいよう授業を行っていく。また、理学療法士、作業療法士としての臨床をイメージできるよう授業内容を工夫するとともに、国家試験対策としてのアドバイスも行っていく予定である。

試験に関しては、難易度を上げ学習習熟度を的確に把握できるよう検討する。

科目名

44.小児科学

担当教員

内藤 通孝

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

93.2%

回答者数

68 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

95%以上(「どちらかといえば」を含む)の学生が目標を意識して意欲的に取り組み、DPに基づく到達目標を達成できたと回答している。事前事後学習については、25%の学生が「全くなし」と回答しているが、毎回授業後にGoogle Classroomで「確認問題」に取り組んだので、最低限の復習は行ったと考えられる。

自由記述では、毎回授業後のGoogle Classroomでの「確認問題」や最終回授業での「誤答の多い問題」の解説がよかったが24名あった。毎回の授業はパワーポイントスライドを用いて行ったが、スライドがわかりやすい、Google Classroomでの予習用事前配信と復習用事後配信がよかったとの意見が16名あった。また、授業の説明がわかりやすかった(14名)など、全般的には好評価を得た。

本学着任後初めての講義で不慣れなこともあり、シラバスに記載のように毎回の授業を单元ごとに区切りよく実施できず遅れ気味になった面もあるが、総じて学生に満足してもらえる授業を行うことができた。

◆今後に向けて

高評価であった以下の方式を継続する。

- ①Google Classroomを用いて、事前に「予習用スライド」、授業後に「復習用スライド」を配布する。さらに、最終的に誤り等の必要な修正・補足をした「確定版」を配布し、以後いつでも「小児科学」の復習や見直しができ、関連する科目の学習にも役立つようにする。
- ②スライドはわかりやすいとの評価であったので、パワーポイントを用いた授業を継続する。
- ③毎回の授業終了後に、Google Classroomで〇×式の「確認問題」を送信し、その日の授業の理解度を各自が確認できるようにする。
- ④最終の授業で、確認問題の中で誤答が多く、補足説明が必要と思われる事項について詳しく解説する。

少数ではあるが、授業の途中段階で小テストを実施してはとの意見があった。今回は「確認問題」の提出に期限を設けなかったが、授業終了後速やかに復習をするよう、次回からは確認問題に提出期限を設け、平常点の評価とする。また、1名のみであるが、スライドの文字が小さくて見にくいとの意見があった。スライドはできるだけ文字を大きく、かつ見やすくなるように色や配置を工夫しているが、見にくい場合は、その都度遠慮なく申し出てほしい。

科目名	45.リハビリテーション医学
-----	----------------

担当教員	長谷川 幸治
------	--------

専攻・配当年次	PT・OT 1年	履修登録者数	93 名
回答率	97.8%	回答者数	91 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

1時間未満の講義前後の学習時間は50％程度である。学習時間がない学生は35％であり、もう少し予習と復習時間を増やしてほしい。講義内容はスライドやシラバスが良かったとする意見が半数以上である。批判的な少数意見として、量が多いとか難しいとする意見を取り入れスライド内容を変更する。医学生が用いる標準リハビリテーション医学の教科書を参照しているので内容を優しくする。授業中に質問する必要がなかったと57％が解答していることは網羅的かつ総論的な講義に疑問を生じなかったのか、理解できなかったのかは判別できなかった。

◆今後に向けて

- ①パワーポイントのスライドを解りやすく作り直し、スライドのプリントを講義前に配布して予習を可能にする。
- ②スライドに提示した医学的な疾患概念を安易な言葉で解説して学生の理解促進に努める。
- ③毎回プリントにある小テストを授業後に回収して授業貢献度として評価する。
- ④現在行っているパワーポイントとプリントを併用した授業は続行する。
- ⑤網羅的かつ総論的な内容であるので具体的なリハビリテーションの現状を講義内容に加える。
- ⑥リハビリテーションの基本的な用語を講義で説明し、よりリハビリテーションの概念を理解できるようにする。

科目名

46.医療安全学

担当教員

長谷川 幸治、横尾 和久

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

92 名

回答率

93.5%

回答者数

86 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

医療安全の原則を医師会医療安全マニュアルに基づいて講義した。学習時間が0分(全くなし)が35名で約30分が32名、1時間以上が9名だった。多くが予習復習時間は大幅に不足している。学部1年生の学生が医療についてほとんど知識がなかったことだけでなく、教員の自覚も不足していたことも原因である。講義内容は具体的な内容に関する意見はなかった。インシデントレポートについて役に立ったという記載も多数見られた。医療内容に関して具体的に不具合が生じた場合は隠蔽しないで、速やかにかつ正確にインシデントを報告することを到達目標とした。学生の到達目標の達成度は50%と比較的高かった。さらに授業の満足度は高かった。

◆今後に向けて

入学6か月後に始めることは学生にとっては医療安全を理解することは困難である。医学部においてさえ他の学習量が多く医療安全は軽視されているのが現状である。しかし最低限の医療安全学の知識は療法士になる学生には重要である。

①救急蘇生の授業は医療者として意義がある。実際医師は心マッサージ・AEDを学生時代に授業を受けることはないが、卒業後は最低限の医療技術である。療法士が行うことは稀れであるが、救命救急を通じて医学の一端をになっていることを経験できれば教育として有用である。

②学生が医療安全の理念を理解することは重要な課題である。医学的問題だけでなく、法律的問題もあるので授業内容は、抽象的でかつ難しくなることが多くならざるをえない。しかし学生は少なくとも医療的な問題点、医療事故(インシデント・アクシデント)とは何かを理解すべきである。

③今年度はケーススタディとして「運動訓練中の転倒による大腿骨近位部骨折」「運動リハ中の心臓停止」の事例を取り上げて検討を行った。来年度も具体的な症例を検討することで卑近に起こる事件として講義をする予定である。

科目名

47.臨床検査・画像診断学

担当教員

内藤 通孝、長谷川 幸治

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

89.0%

回答者数

65 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

約95%（「どちらかといえば」を含む）の学生が目標を意識して意欲的に取り組み、DPに基づく到達目標を達成できたと回答している。事前事後学習については、半数近くの学生が「全くなし」と回答しているが、臨床検査学では、毎回授業後にGoogle Classroomで「確認問題」に取り組んだので、最低限の復習は行ったと考えられる。

臨床検査学の自由記述では、毎回授業後のGoogle Classroomでの「確認問題」や最終回授業での解説がよかった、毎回の授業はパワーポイントスライドを用いて行ったが、スライドがわかりやすかったなどの意見があった。

本学着任後初めての「臨床検査学」講義で不慣れなこともあり、シラバスに記載のように毎回の授業を單元ごとに区切りよく実施できなかった面もあるが、総じて学生に満足してもらえる授業を行うことができた。

画像診断学では授業前にパワーポイントの講義内容を配布した。スライド内容は療法士として最低限の理解が必要なものとした。予習復習を全くしていない学生が半数を超えているので実際の内容を確認して講義内容を習得できたと考えている。毎回小テストを作成したので自己点検も可能である。テストの提出によって講義への参加の評価とする予定である。講義内容は中枢神経、整形外科疾患（骨折・慢性変性疾患）の画像を豊富に提供し丁寧に解説した。シラバス内容と異なる画像は修正する。

◆今後に向けて

全般的に高評価であったので、臨床検査学は基本的に以下の方式を継続する。

- ①Google Classroomを用いて、事前に「予習用スライド」、授業後に「復習用スライド」を配布する。さらに、最終的に誤り等の必要な修正・補足をした「確定版」を配布し、以後いつでも復習や見直しができ、関連する科目の学習にも役立つようにする。
- ②スライドはわかりやすいとの評価であったので、パワーポイントを用いた授業を継続する。
- ③毎回の授業終了後に、Google Classroomで「確認問題」を送信し、その日の授業の理解度を各自が確認できるようにする。
- ④最終の授業で、確認問題の中でとくに誤答が多く、補足説明が必要と思われる事項について重点的に解説する。

画像診断学は講義の難易度は適当の評価が多かったのでさらに解りやすくスライドを改善する。予習・復習時間が少ないのは問題である。スライドは印刷物を繰り返して見るのが重要である。教員の豊富な臨床経験から実際に経験した鮮明な画像を中心に、療法士に必要な疾患関連情報を提供する。

科目名

49.リハビリテーション概論

担当教員

山田 和政

専攻・配当年次

PT・OT 1年

履修登録者数

96 名

回答率

94.8%

回答者数

91 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

授業内容、授業方法、授業担当教員、授業満足度、総合評価については、いずれも4段階評価で3.8前後と良好な結果が得られた。昨年度と同様に、授業でのグループワーク演習、毎回配布されるオリジナル資料やパワーポイントの活用は「理解しやすく、内容の理解に役立った」との意見が複数の学生から寄せられた。また、授業の進度や難易度についても概ね適切であると評価された。さらに、今年度から導入した予習・復習用プリントについては、「自主学習に役立った」との感想が多くの学生から得られており、学習支援の効果が示された。受講態度に関しては、ほとんどの学生が授業に意欲的に取り組んでいたと回答していた。しかし一方で、事前・事後学習時間については、昨年度と比較して「1時間未満」と答えた学生は減少したものの、5割弱を占めていた。そのため、授業内での積極的な姿勢は評価できるものの、日常的な学習習慣や学習量については、十分に定着しているとは言い難い点が課題として残った。

◆今後に向けて

授業評価アンケートの結果から、授業内容(難易度を含む)や授業方法について大きな変更の必要はないと考える。今年度は新たに2点の取り組みを行った。①事前・事後学習の支援として、学生の学習意欲を高め、学習習慣を定着させることを目的に、毎回予習・復習プリントを配布した。その結果、自主学習に役立ったという評価は得られたが、学習時間の確保には十分な成果がみられなかった。次年度も継続し、効果を検証したい。②受講者が100名近いため、マイクを使用し後方まで聞こえるよう配慮した。

一方、昨年度同様、定期試験の成績は想定より低く、知識の定着が不十分であることが明らかとなった。その対応として、授業中に隣同士での知識の確認や一部グループワークを取り入れ、理解を深められるよう工夫した。また、大学の授業は90分と高校時代と比べて長く、集中力が持続しにくい傾向が見られた。そのため、可能な限り「45分×2テーマ」で授業を構成し、理解を深められるよう努めた。今後も、学習習慣の定着と知識の確実な理解を目指し、これらの取り組みを継続して改善していきたい。

科目名

51.障がい者スポーツ概論

担当教員

加藤 真弓、鳥居 昭久

専攻・配当年次

PT・OT 2年

履修登録者数

73 名

回答率

94.5%

回答者数

69 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

総合評価が3.7であり概ね良好であったと考える。最も低値な項目は「シラバスに記載されている「学習到達目標」や「履修上の注意」を意識した学習への取組み」で3.48、高値は「教員がシラバス記載の「学習到達目標」や「成績評価」について授業内で説明していたか」で3.95であった。授業に対する参加について「意欲的に参加した/どちらかと言えば意欲的に参加した」者は約9割であり、授業を受けてDPに基づく授業達成目標の達成について「達成した/どちらかと言えば達成した」者も約9割であった。自由記述において肯定的な記述が多く特に実技を取り入れることで、障がい者スポーツの興味や理解が得られやすかったと思われる。多くが意欲的に参加し目標を達成できていたようであるが、一方で一部の者において意欲的な参加等が難しかったようである。“スポーツ”自体の好みや苦手意識、また、想像していた内容と異なるものであったのかもしれない。また、知識習得の評価も他と比較しやや低いのは、「障害」をもたらす疾患に関する知識を並行して学んでいる状況であったため「障害」の理解ができていないことも要因の一つと考える。

◆今後に向けて

今後も座学だけでなく、実技を取り入れ授業を行いたい。体験することで、一般のスポーツと障がい者スポーツとの違いの理解や、障害の理解の促進が得られやすくなると考える。カリキュラムとして、疾患学が2年生前期に並列して開講しているため、疾患の理解、疾患から生じる障害の知識があまりない段階であるため、代表的な疾患と障害の特徴について授業内で説明する時間を設ける必要性を感じた。多くの学生が障がい者スポーツに触れた経験がないため、まずは「知る」ことから始まるが、単に覚える授業ではなく、理学療法士、作業療法士を目指す学生のための障がい者スポーツ概論の授業であるため、「スポーツ」、「障害の特性」、「地域社会の特徴」、「リハビリテーション」を関連させて「考える」ことができる授業を展開していく。

科目名

52.理学療法概論

担当教員

加藤 真弓

専攻・配当年次

PT 1年

履修登録者数

61 名

回答率

90.2%

回答者数

55 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

授業は、教科書の内容を中心に説明した。また前期開講科目である解剖学・生理学・リハビリテーション概論の授業範囲の知識の確認と理学療法との関連を意識し授業を展開した。教科書の中でも重要な点については、Power Pointを用いて説明した。前年度はPower Point資料は配布しなかったが、今年度は配布し、資料内にメモをとるよう促した。また、授業では必ず教科書のページ数を伝え、下線を引かせるなどした。講義が中心であったが、グループワークと発表、小テストを2回実施した。小テストの目標点を7割に設定し、未達成者に対して補習を実施した。

各質問項目の平均点が3.6であったことや自由記述内容から、概ね良好な結果であったと考える。9割以上の学生が授業目標を意識(どちらかというと意識を含む)して取り組み、DPに基づく目標の達成感も8割が感じている。事前事後学習については、前年度は約5割の学生が全くしていないと回答していたが、今年度は2割であったことは、目標設定した小テストと補習の実施が影響したのではないかとと思われる。

◆今後に向けて

多くの学生は、授業に対する意欲や目標を意識して積極的に取り組んでいた。学習時間の確保は前年度よりもできているが、試験結果を見ると必ずしも十分とは言えなかった。その要因の一つとして、言葉の暗記にとどまり、理解に至っていないことが考えられた。授業方法については、スライド資料の提示、小テストと補習、グループワークについては肯定的な意見であったことから継続していく。理解を深める取り組みとして、Googleformでの振り返りを通して、学んだことを説明するアウトプットの機会を検討したい。自由記述に「難しい」「何が重要か資料に記してほしい」とあったが、授業にて重要な点についてを資料で示し、説明しているため、しっかりと聞き取ってメモをするなどして自身で情報を捉えるようにしたり、友人との学習でのやり取りの中でできるようになってもらいたい。

科目名

53.理学療法研究法Ⅰ

担当教員

宮津 真寿美

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

90.7%

回答者数

39 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

総合点が、3.41だった。各項目で、3.50以下だったのが、「説明」3.41、「ICT」3.41、「理解促進」3.41、「知識習得」3.46だった。

自由記述では、「先輩の研究を聞いてよかった」「先生の研究を聞いて参考になった」など、先輩や教員の研究を知ることができてよかったという意見が多数あった。特に教員の研究を知り、「先生のすごさがわかった」「研究者としての一面を知った」など、教員の研究を初めて認識した様子がある。また、「卒業研究についてある程度何をするのかイメージがわきました」「卒業研究の第一歩になった」など卒業研究のイメージがついたようである。一方で、「研究の種類が難しかった」という意見がある。

◆今後に向けて

本科目は、演習科目である。本科目と、3年次以降の「理学療法研究法Ⅱ」、「卒業研究」を通して、これまでの学習で抱いた疑問や気付いた矛盾を明らかにするための、思考過程と問題解決能力を修得する。

本科目は、「理学療法研究法Ⅱ」に先だって、「研究の理解」「研究を知る」ことをテーマに、研究の意義や流れ、種類を説明するとともに、文献の検索方法を教授した。また、先輩の卒業研究発表会に参加したり、教員の研究テーマを聞いた。

知識修得だけの授業が少なかったため、「説明」「理解促進」「知識習得」の項目がやや低評価だったと考える。文献の検索方法は学生がPCを使いながら行ったが他の授業でICTの利用はなかった。先輩や教員の研究を知ることが高評価だったため、継続していく。

科目名

55.人体触察法実習

担当教員

木村 菜穂子、松村 仁実、藤本 大介

専攻・配当年次

PT 1年

履修登録者数

62 名

回答率

96.8%

回答者数

60 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

すべての項目で、3点以上の結果であった。ほとんどの学生が意欲的に取り組んでいた。事前事後学習時間は学生によって異なっていた。1～2時間程度の学生が多くを占めていた。4時間以上の学生も1割いる反面、まったく行っていないと回答する学生も1割弱いる結果であった。

自由記載では、「わかりやすさ」に関する内容が多く、指導方法への評価が高かった。次いで「難易度」に関する内容であったが、「ためになった」などと併記され、多くは肯定的な回答であった。「確認テスト」などの機会は評価される部分と、授業環境においては、「見やすさ・時間配分」の点で改善要望が見られた。

◆今後に向けて

現在高く評価されている「わかりやすい指導」と「質問しやすい環境」を維持・強化しつつ、学習効果のさらなる向上を図る。難易度については、学修価値を保ちながら到達目標と評価基準をより明確に提示し、段階的に理解を深められる構成へ改善する。また、確認テストは理解定着の機会として継続し、事前・事後学習につながるフィードバックを充実させる。あわせて、実技時の見やすさや時間配分を見直し、学習環境の公平性を高める。さらに、事前事後学習時間の差については、具体的な学修モデルや推奨学習時間を示すなどにより、学習習慣の形成を支援していく。

科目名

57.運動療法総論

担当教員

松田 文浩

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

93.0%

回答者数

40 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本科目では、学生が運動療法の基礎知識および基本的な考え方を理解し、将来自身が運動療法を実施する際の具体的なイメージを持てるようになることを意識して実施した。授業内では、関節可動域運動や筋力増強運動などを実際に体験する機会を設け、運動療法への理解を深める工夫を行った。また、小テストを取り入れることで知識の整理と定着を図った。その結果、授業評価アンケートでは全てのカテゴリで3.6以上の評価を得ることができ、学生にとって取り組みやすい授業を提供できたと考えられる。自由記載からも、概ね分かりやすいとの意見がみられた。一方で、事前・事後学習時間が1時間未満と回答した学生が7割以上を占めており、理解を十分に深める学習時間が確保できていない可能性がある。その影響か、一部の学生からは内容が難しいとの意見があった。事前・事後学習の促しが十分でなかったかもしれない。

◆今後に向けて

今回の授業評価および学生の学習状況を踏まえ、次年度に向けていくつかの改善を行う予定である。まず、各講義において到達目標や重要なポイントをこれまで以上に明確に示し、学生が「理解すべき内容」と「暗記しておくべき項目」を区別して学習できるよう、配布資料や口頭での説明に工夫を加えたい。特に、臨床現場で頻用される用語や基本概念については、繰り返し確認する機会を設け、知識の定着を図る。また、授業内で行ってきた関節可動域運動や筋力増強運動の体験、小テストによる知識整理といった取り組みは、一定の評価を得ていることから、今後も継続して実施する。一方で、事前・事後学習時間が十分に確保されていない現状を踏まえ、その重要性を授業内で繰り返し伝えとともに、学習課題の提示や振り返りの機会を通して、学生が主体的に学習に取り組める授業構成を目指したい。

科目名

61.検査測定法

担当教員

木村 菜穂子、山田 南欧美、藤本 大介

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

95.3%

回答者数

41 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

集計データを見ると、概ね3.5以上の評価であり、授業の進め方については大きな問題はなかったと考えられる。基本的に本科目は「知識」を修得することを目的とはしているが、そのための手段として演習を多く取り入れ、実技を通して理解し、知識を習得することを目標としていたが、その意図を多くの学生は理解し、取り組むことができたと思う。これは、自由記載「演習により理解がすすんだ」といった多数の意見からも読み取ることができる。さらに、本アンケートの自己評価でほとんどの学生が「熱意を持って」「目的意識を持って」取り組んだと考えており、半数以上の受講者が授業前後にしっかりと学習に取り組んだことがデータから見ることもできる。

一方、学習時間においては全く取り組まなかったと答えた受講者も一部存在したことは、大変残念である。

◆今後に向けて

受講者の多くが、本講義の目的や重要性を理解して取り組んだことが本アンケート結果から理解できたことはよかった。また、演習時間を多く設定したことも、おおむね好意的にとらえられていることも自由記載から分かった。1年次開講の「人体触察法実習」で得た知識をきちんと活かすことができている受講者も多く、カリキュラム編成上も短期大学での同時期開講に比べ、よかったと思う。

しかし、「授業内容が多すぎる」といった意見も少数ではあるが自由記載にあった。確かに、覚えなければならない、理解しなければならない内容はかなり多いのは事実であろう。学ぶべき内容を減らすことはできないが、受講者の理解がよりスムーズに進むよう、今後も工夫していきたいと考える。

科目名

62.検査測定法実習

担当教員

木村 菜穂子、山田 南欧美、藤本 大介

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

90.7%

回答者数

39 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

集計データをみると、多くの項目で3.5以上の評価であり、全体的には大きな問題はなかったと判断できる。「理解」の項目が他に比べると若干低めであるが、これはアンケート実施時期が授業最終回で試験前であったことから、正しく実施できるかどうかという自己評価が低く表れたからだと予測される。

学生の意識の項目でも、大多数が「意欲的に/どちらかと言えば意欲的に参加した」と答えており、事前事後学習で半数が1時間以上と回答していることから分かる。ただ、一部の学生ではあるが「全く事前事後学習に取り組んでいない」との回答もあり、理由が分からないため心配な点である。

自由記載でも、「分からないところをすぐに先生に聞ける環境であり、よかった」という意見が多く、授業の進め方としても問題はなかったと思われる。

◆今後に向けて

自由記載で少数ではあるが以下のような意見があった。①質問したい時にすぐ対応できる先生がいないことがあり、もう1人くらい先生がいるとよいと思った(→基本、3名体制での実施)。②先生によっていうことが違うことがあり、とまどった。③授業内容に対して時間が足りなかった。④各評価を1つ1つ個別に説明してほしい。

いずれの意見も重要であると思われるが、学習内容の基本的部分は「検査測定法(前期開講)」で説明はしており、それを基に学生自身が考え、理解を深めていくことが今後の学習においても重要であると考えている。ペアを組んで実習を行うことから、グループで考える、不明な点は教員に質問してさらに理解を深める、という環境は整えていることから、授業開始時にその旨を学生により丁寧に説明すべきかと思う。また②の意見は科目担当教員で共有していく。

科目名

65.神経筋障害理学療法治療学

担当教員

林 尊弘

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

95.3%

回答者数

41 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

回答率は95.3%と高く、集計結果は授業全体の傾向を概ね反映していると考ええる。設問1-8、13、15の平均は3.44-4.00(4段階)であり、授業内容への興味、説明の明瞭さ、理解促進の工夫、総合評価はいずれも高水準であった。自由記述でも、スライド・動画・図を用いた説明の分かりやすさ、小テストによる定着、補講対応、国家試験や臨床との関連付けを評価する記載が多かった。一方で、内容量の多さや難しさを指摘する記載も複数みられた。また、設問11の事前事後学習時間の平均は2.07と相対的に低く、授業外学習の確保には個人差があると考えられた。以上より、授業内の理解支援は評価されている一方で、該当学年の学生には知識や量ともに学習負荷が高かったため、授業外学習の支援設計が今後の課題と考える。

◆今後に向けて

次年度に向けては、分かりやすさと臨床・国家試験との接続を維持しつつ、内容量が多い単元の学習負荷を調整する予定である。具体的には、各回の冒頭で到達目標の明示だけでなく、講義内で「必ず理解してほしい点」を提示する。加えて、小テストと補講は継続し、難度の高い領域には要点整理資料、授業後の確認問題などの追加を検討し、授業外学習を始めやすくする。これらの改善により、理解度の維持と学習時間の質・量の向上を両立させ、難しいと感じる学生への支援を早期化する。

科目名

67.運動器系障害理学療法治療学

担当教員

松田 文浩、齊藤 誠

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

100.0%

回答者数

43 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本講義では、整形外科系疾患の病態理解と理学療法治療の基本方針を中心に、動画やスライドを用いた解説と定期的な小テストを組み合わせで実施した。学生評価は概ね良好であり、「内容が整理され理解が深まった」「小テストにより復習の機会が確保できた」などの意見が多く、継続的な確認学習が理解促進に寄与したと考えられる。自由記載においてネガティブな記載はなく、授業構成として一定の妥当性を有していると考ええる。

◆今後に向けて

事前資料やスライドを中心とした体系的な講義構成および定期的な小テストは、学修習慣の形成と理解の定着に有効であったため、今後も継続する。今後は、小テストの結果を踏まえた解説をより丁寧に行い、理解が不十分な領域を明確化することで学修の質を高める。また、重要項目と応用的内容の位置付けを講義内で一層明確にし、学生自身が優先順位を意識して学習できるよう支援する。これにより、応用的な知識の活用が求められる臨床に直結する基礎力のさらなる向上を図る。

科目名

73.老年期障害理学療法学

担当教員

山田 和政

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

95.3%

回答者数

41 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本授業の総合評価は3.63／4.00点と高水準であり、授業内容に対する興味や理解、授業方法に関する進行や説明、ICTの活用のいずれにおいても安定した高い評価を得た。シラバスの明確さは特に評価が高く、授業目標や学習内容が学生に適切に伝わっていたことが示唆される。また、教員による理解の促進についても評価が高く、説明の丁寧さや構造化された授業展開が一定の効果を上げていたと考えられる。自由記述では、「分かりやすい」、「復習しやすい」といった肯定的意見が多く、イラストや図表を取り入れたスライド、穴埋め形式の授業プリント、毎回配布した予習・復習プリントが、重要ポイントの明確化や理解の深化、集中力の維持や記憶の定着に寄与していたと読み取れた。さらに、過去の授業内容の振り返りや他科目との関連づけ、実技時間の設定は、知識を断片化させず、統合的理解の向上につながったと考えられる。一方で、授業プリントでの穴埋め箇所の記入時間の不足に関する指摘があり、改善の余地が示された。今後は、授業の進行において記入や思考の時間を確保するよう努めるとともに、より主体的な学びを促進する授業を展開していきたい。

◆今後に向けて

本授業の振り返りを踏まえ、イラストや図表を活用した視覚的に分かりやすいスライド、穴埋め形式の講義プリント、ならびに毎回配布してきた予習・復習プリントの取り組みは、学生の集中力の維持や重要事項の明確化、学習内容の定着に有効であると考えられ、今後も維持していく。また、過去の授業内容の振り返りや他科目との関連づけ、実技時間の設定についても、統合的な理解を促す方法として重視し、引き続き行っていく。一方で、授業プリントでの穴埋め記入や説明に必要な時間を十分に確保できるよう授業の進行速度を見直し、学生が思考し、知識を整理する時間をしっかりと設けていきたい。これらの改善を通して、より主体的で深い学びを支援する授業運営を目指したい。

科目名

82. 予防理学療法学

担当教員

林 尊弘

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

97.7%

回答者数

42 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

総合満足(設問13)平均3.62、総合評価(設問15)3.64。授業の明瞭さ(設問4)3.81、学習目標・評価の説明(設問7)3.92は相対的に高かった。興味(設問1)3.69、理解のしやすさ(設問2)3.57、学習到達目標を意識した取組(設問10)3.31、受講意欲(設問8)3.48は中位であった。自由記述では、スライド配信、書き込み欄のある資料、適切な進行速度が理解に有効との意見が多かった。一方、「病気を未履修で難しかった」との指摘もあった。資料と説明は評価が高い一方、基礎知識の差と授業外学習時間の不足が理解差の要因と考える。特に、質問行動(2.84)と学習時間(2.10)が相対的に低く、到達目標の意識(3.31)にも改善余地がある。以上より、資料と説明の分かりやすさは一定の評価を得たが、基礎知識の前提と授業外学習の不足が理解のばらつきにつながったと考える。

◆今後に向けて

現状で有効な配布資料(書き込み欄付き)とスライド配信、進行速度は継続する。未履修の病態に起因する難しさに対応するため、講義の中で病態に関する内容を盛り込む時間を増やすとともに、各回冒頭で復習を行っていく。理解状況の可視化として5問前後の小テストと即時集計を実施し、学生間で理解度が低い点などを共有する。また、講義毎にリフレクションシートの記載を必須とし、「講義を通じてわかったこと・理解できなかったこと」や「次回の目標」を聴取する。

事前事後学習には講義の終了時に到達すべき内容を提示する到達目標の可視化を強めるため、現状でも行っている、各回スライド冒頭に「本時の目標」と評価観点を併記する。

行動目標として、設問11平均3.0以上、設問9平均3.2以上の達成を目指す。今年度同様に、授業内に1回以上、ペアでの確認問題を組み込み、質問事項の誘発と誤った解釈の早期修正を図る。

科目名

83. 予防理学療法学実習

担当教員

加藤 真弓、濱田 光佑、山田 南欧美、臼井 晴信

専攻・配当年次

PT 2年

履修登録者数

43 名

回答率

79.1%

回答者数

34 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

【発達領域】

発達領域では、未就学児と関わる機会があまりない学生にとって貴重な機会であったことをうかがわせる自由記載の内容であった。また、グループ単位で未就学児との実際の関わりとそのための準備を行う授業展開となっていることから、それらの講義を通して自身の力量を振り返る機会となっているようであり、本講義の意図することが達成できていると考える。

【介護予防領域】

「意欲的に参加したか」、「学習到達目標や履修上の注意を意識して学習に取り組んだか」の質問に対し、回答者全員が肯定的な回答であった。自由記述においても、実習形式で高齢者との直接的交流の機会があることと、高齢者の理解に特に繋がったようであり、本科目の目標の一部が達成できたと考える。

◆今後に向けて

【発達領域】

発達領域では、短期大学から大学へカリキュラムを移行するにあたり講義回数が減ることとなり、講義内容を検討した。具体的には、学生が主体的に活動内容を検討する時間を減らし、ある程度教員から活動内容を提示することとした。この点に関しては、学修効果とのバランスを今後も検討し、学生の学びに最適な形を今後も模索する必要がある。

【介護予防領域】

昨年度の課題であった「学習到達目標や履修上の注意を意識して学習に取り組む」ことについては、解決できたと考える。今年度、体力測定などで説明したことを正しく理解し的確に実施することが困難であった場面が散見された。事前準備時間が0時間の者が約20%いることから、事前準備と正しく伝わっているかの確認が必要である。

科目名

85.臨床実習Ⅰ（見学）

担当教員

山田 和政、林 尊弘、加藤 真弓、松村 仁実、宮津 真寿美、
臼井 晴信、木村 菜穂子、齊藤 誠、山田 南欧美、濱田 光佑、藤本 大介

専攻・配当年次

PT 1年

履修登録者数

60 名

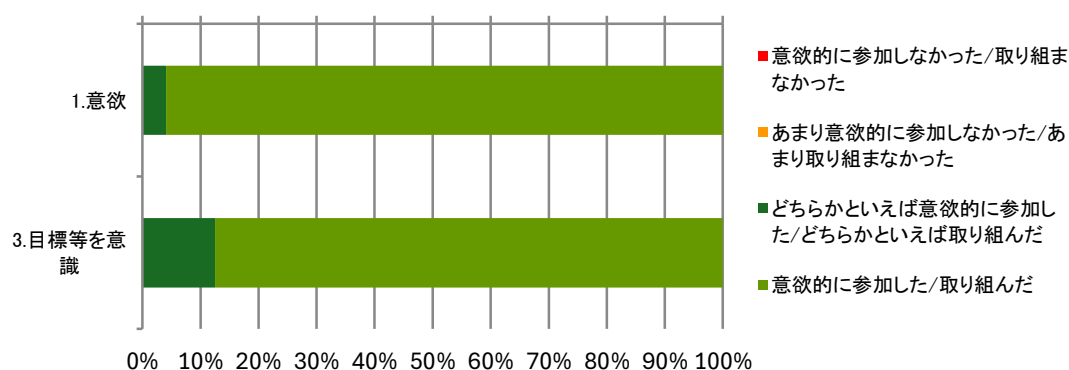
回答率

81.7%

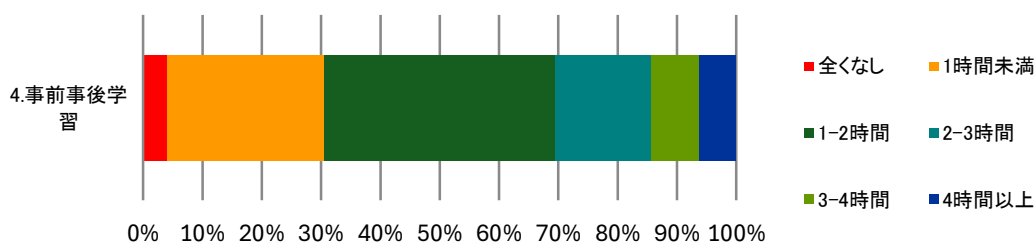
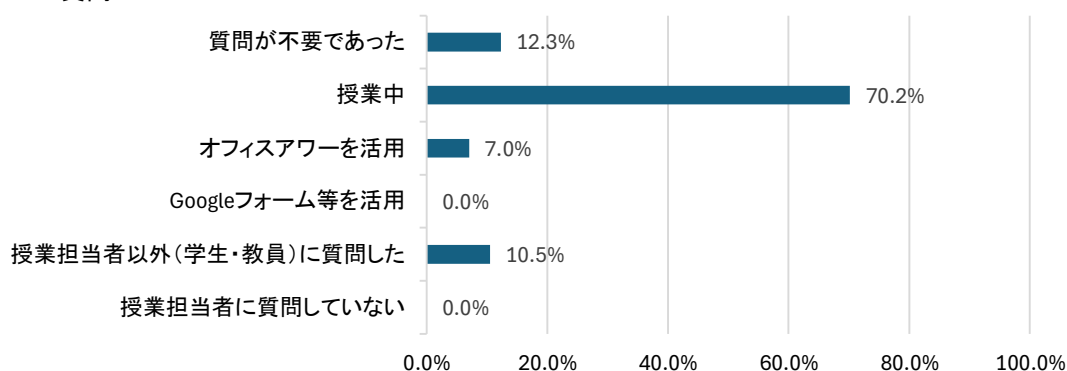
回答者数

49 名

◆集計データ結果について

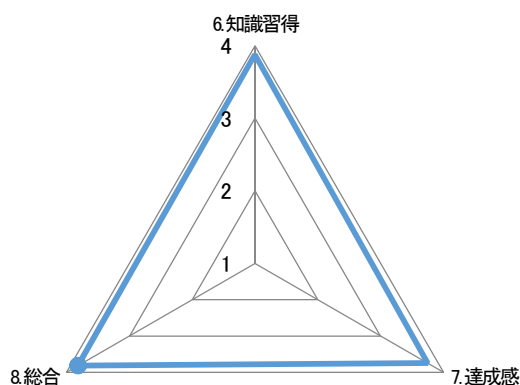


2.質問



6 学生の満足度(知識習得)
7 学生の満足度(達成感)
8 総合

(軸単位:4段階評点)



科目名	90.臨床セミナー
-----	-----------

担当教員	松村 仁実、木村 菜穂子、齊藤 誠			
専攻・配当年次	PT	1年	履修登録者数	60 名
回答率	83.3%		回答者数	50 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

本授業は、臨床実習に臨む前後において、理学療法学専攻の学生として求められる基本的態度を習得し、円滑な実習遂行につなげることを目的として実施した。特に、個人情報保護や安全配慮といった臨床現場での注意義務について理解を深め、適切な対応ができるようにすることを重視した。

実習後には学修成果の振り返りと共有を行った。授業評価アンケートにおいては、学習成果の振り返りによって学生間で情報共有できたことを有意義に感じる意見が多かった。

◆今後に向けて

本科目は、円滑な臨床実習を遂行する上で重要な役割を有する科目である。今後は臨床現場における基本的態度について、各学生がしっかりと目的を理解することが必要であると考えている。具体的な事例を用いたケーススタディなどを充実させ、態度が患者や施設に与える影響を実感できる機会を設けることで、学ぶ意義の理解を促進する。

科目名

93.作業療法概論

担当教員

岩井 和子

専攻・配当年次

OT 1年

履修登録者数

33 名

回答率

90.9%

回答者数

30 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

①成績に関しては、昨年同様の難易度筆記試験であったが、再試験者が昨年よりも多かったことがあり、これは学生のアンケート項目の「理解促進」についてもあるように、教員として 学生の理解度を考慮しての授業進行が不十分であったかと思われる。

②前期末に見学実習で臨床現場に入ること、また、概念的な知識のみでは学生の興味を喚起しにくいことを踏まえ、後半はリハ対象となる主だった疾患、基礎的なリハ技術について解説したがこれについては学生の興味関心を高めることができた半面、真の理解が難しかったかと考えられる。

③授業開始時に、授業日程表(授業日程/目標 /内容/評価基準等)を用いて説明しているが、この点について必ずしも学生に充分周知されていないようである。

◆今後に向けて

①については、授業資料のブラッシュアップ(例年行っているが)にて、学生自身でも自学修しやすい内容を取り入れる、また、ミニツツペーパー等の充実に努め、学生の理解度を測りながら授業進行を行うこととする。

②に関しては、資料のブラッシュアップ、また、授業講義においてもポイントの強調をすることで、学生が自学修しやすい内容とする。特に近年、日本語の語彙力、英語の語彙力が低い学生も多いことから、かみ砕いた説明が必要と思われる。

③DPとの関連も含め、授業目的や評価について、自学修や授業聴講への意識が高まるよう説明をより丁寧に行うこととする。

科目名

94.臨床運動学

担当教員

渡邊 豊明、加藤 真夕美

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

29 名

回答率

58.6%

回答者数

17 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

すべての項目で平均3.59点以上であり、バランスのとれた評価であった。本講義の工夫としては①教科書をしっかり読む習慣をつけるために、教科書のガイドとなるようなレジュメを作成すること ②体験学習を多く取り入れて「体で理解する」仕掛けを用意すること の2点である。②について、本授業は講義という形式の授業であるが、疑似体験しながらそれに関する知識をその都度入れていくことにより、共感的に対象者を理解することを促進した。質問(9)では92%の学生が授業内外で質問したと回答しており、また意欲(8)と目的意識(10)において「取り組んだ」「どちらかといえば取り組んだ」と回答した学生が100%であり、学生の意欲を引き出すような授業を展開できていたと考えている。

自由記載では「言葉だけではイメージできない部分があった為、実際に体験することができてよかった」「杖の歩行など学んだ結果、スーパーのバイトで杖を使っている人を見るとどのような歩行か気になって見るようになった」等の記載があり、②が学習を補足する一助となったと考える。

◆今後に向けて

この授業の役割として、運動学がいかに臨床活動に結びついているかを理解すること、臨床実習において求められる「動作分析」の基礎を押さえること、臨床実習の場で実践できるよう最低限の動作分析技術を身につけること、の3点を意識している。まだ運動学が十分に習得されていない学生にとって、臨床的応用となると理解しがたいと思い、極力体験的で学生の身近に引き寄せた授業を心掛けた。大学1期生のため未知数であるが、3年次の臨床実習にここでの知識や技術がどのように活用されたか、何が足りなかったかを追跡していく必要がある。

科目名

95.基礎作業学

担当教員

岩井 和子

専攻・配当年次

OT 1年

履修登録者数

32 名

回答率

96.9%

回答者数

31 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

①具体的な作業課題を取り入れることで、学生は全体に興味を持って取り組んでくれたと考えている。自由記述においても、そうした内容が多かった。

②一方で、「理解」についての評価が最も低かったのであるが、8コマの授業の中で、作業課題を取り入れることで理論説明の時間制約が出てしまったと思われる。

③上述の結果として、筆記試験における得点が低くなっていると考えられる。

④レポート課題中に、情報科学で、学んでいるエクセルでのグラフ作成を含ませることで、各教科間の繋がりも意識することを目指したが、学生は、習ったことを使ってみることが出来て意欲的に行っていた。

但し、筆記試験の結果においてもそうであるが、レポート作成の完成度は学生間で大いに差があり、1年目という事もあるが、今後、体裁/内容等について、提出後の指導も必要と考えられた。

◆今後に向けて

①について:次年度も学生自身が手や体を使って行う作業課題をさらに練った内容で授業に取り入れる事とする。

②、③について:理論説明について、資料、説明ともに重要部分のポイントをさらに明確にすること、学生自身がノートテイクする必要性を増す授業形態とする。学生が自習できるよう、理論部分の資料はもう少し増やすこととする。

④については、レポート提出後の指導を更に行うこととする。

科目名

96.基礎作業学実習

担当教員

横山 剛、松田 裕美

専攻・配当年次

OT 1年

履修登録者数

30 名

回答率

100.0%

回答者数

30 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

教え教えられる体験を盛り込んだ授業であるが、自身が思うように伝えても、相手には伝わらないことや自身では思いもしなかったような経験をしたかと思われる。「学習すること」は、分からなさを分かる形にしていく「作業」でもあることも知って欲しいという意図もあり、この授業を計画した。思い通りには進んでいかない時こそ工夫し、指導者に助けを求め（援助要請）、実践していく授業として計画した。授業という守られた構造の中で、新しい作業に挑戦したり、互いに教え教えられる体験を通して良い学びができたのではないかと考えている。この授業で行う「作業」に関して難しさを覚えながらも、多くの学生が意欲をもって授業に参加し取り組んでいたとの回答であった。このことは教員の目から見てもその通りであった。自身が分かる範囲で分かるだけでなく、よく分からない箇所があることを認知して今後も学習に取り組んで欲しいと考えている。

◆今後に向けて

所謂机上の作業を行い、楽しかったという感想を述べていることも考えられるため今一度授業の目的、方法を見直していくように努めたい。学習するということが、常に「楽しい」と感じられるものではないが、「楽しい」とは感じられない学生が、意欲をもって学習することにつなげていくスキルを身につけていくためにこの授業を活用したいと思う。

科目名

99.作業療法評価法

担当教員

清水 一輝

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

30 名

回答率

86.7%

回答者数

26 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

各項目で3.5以上という結果であり、概ね良い評価が得られたと考える。その中で、理解促進の項目がやや低値であった。また、学習時間に関しても、全くなしの回答が4割以上であった。学習の理解を高めるような課題の設定が不十分であったと考えられる。

本科目では、基本的に講義スライドの資料は配布せず、ノートテイクの機会を設けた。スライドに関しては、簡単にまとめられておりわかりやすかったという肯定的な意見もあり、ノートテイクをすることで集中して講義を受けることができたという意見もあった。また、振り返りシートを活用することに対しても肯定的な意見があった。一方で、スライドが多すぎたという意見もあり、講義の中で進捗を確認しながら講義を進めていたが、不十分であった可能性がある。

授業到達目標の達成度について、2名があまり達成できなかったという回答であった。

◆今後に向けて

授業の基本的な構成は継続し、ノートテイクを促すような授業を展開していく。その中で、学生の理解のスピードに合わせた運営をより意識し、提示するスライドの枚数や文字数などの見直しを行いたい。また、振り返りの機会を設けることで学生の理解を促進できている可能性があるため、そちらも継続する。

それに加え、学生の理解を促進するための課題等を検討していきたい。小テストの実施や講義時間以外での課題などに取り組む機会を作ることで、より高い学習成果が得られるようにしたい。

授業到達目標の達成ができるように、講義開始時のオリエンテーションでの説明だけでなく、各講義回においても到達目標との関連を示しながら授業を進めていきたい。

科目名

100.作業療法評価法実習 I

担当教員

清水 一輝、渡邊 豊明

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

30 名

回答率

86.7%

回答者数

26 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

全ての項目で3.5以上の結果であり、概ね良好な結果である。また、事前事後の学習時間については、全くなしという回答があったが、試験に向けた学習機会は設けており、全ての学生が事前事後学習に取り組んでいると思われる。授業到達目標の達成度について、あまり達成できなかったという回答があったため、到達目標の意識づけが不十分であったと思われる。

自由記載からは、評価実技について深く学ぶことができ、臨床実習との繋がりを持って理解することができたという肯定的な意見があった。また、教員が2名体制であることで、質問しやすく、フィードバックも得やすい環境であった。ペアを指定して実習を行ったことについては、いろいろな人を相手に実習できたことに対する肯定的な意見がある一方で、相手によっては参加しにくいという否定的な意見もあった。また、補足の情報が多かったこと、教員による説明の違いなどに対しても否定的な意見があった。

◆今後に向けて

今年度は、担当教員の急な変更等もあり対応が後手に回ってしまったが、次年度に向けては教授内容を担当教員間で十分に打ち合わせを行う。実技試験における採点基準や採点の内容の共有、それに応じて授業時間中の説明内容を整理し、後から訂正等をする必要がないようにしたい。また、2名で運営する科目のため、教員の教授内容に矛盾が生じないように準備をしていきたい。

ペアでの学習については、3人で実習をする際にその役割分担等の提示が不十分であったと思われるため、教員から明確に指示をできるようにする。また、実技練習の目的や目標についてもその都度説明することにより、学生同士で共通の認識を持って課題に取り組めるような環境を整えていきたい。

科目名

103.精神障害作業評価学

担当教員

岩井 和子、横山 剛、松田 裕美

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

30 名

回答率

70.0%

回答者数

21 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

学生がおおむね満足した結果であり、集計結果にみられる点数はまず良いものであったと思う。「精神障害」というなかなか目には見えないことを評価するというプロセスは、ただただ検査をして結果を並べ立てれば評価できたというものではないことが良く理解できたと思う。対象者の理解は、自身の理解に応じて理解できるものであることを、理解するための準備としての授業であったこと、また十分には理解できなくても思い切って足を踏み出していかなければならないことが理解できたと思う。「分からないからできない」「できないからできない」ではなく分かるために、できるようになるためにチャレンジすることを学び・継続して欲しいと考えている。

◆今後に向けて

精神医学の学びとの関連にも着目して講義を行ったが今後も継続していきたい。精神障害をもつ方々の評価で、何ができるのかについては今後の関連科目で、より具体的に触れていく予定としている。この授業において今後は、学生の振り返りなどを元に、自身が情報から受け取っているようなことも話題としてディスカッションしたり、さらに考えていく材料(教材など)を提供しながら、授業を展開していこうと考えている。

科目名	106.作業治療学理論
-----	-------------

担当教員	岩井 和子
------	-------

専攻・配当年次	OT 2年	履修登録者数	30 名
回答率	73.3%	回答者数	22 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

作業療法学において、諸外国ではスタンダードになっている作業療法の理論整理の内容であるが、邦書では、良い教科書がないため、翻訳書の教科書であることも学生に難しい印象を与えていると思われる。そのことも踏まえて事例や実際の事象(実際のリハ場面の動画)、基礎科目(解剖、運動学等)を引き合いに出しながらわかり安い説明を尽くしたとは思いますが、さらに工夫が必要と考えている。

前職の2大学では3年生前期に組まれていた科目を2年次にということでもあり、かなりわかりやすい説明、資料作成を意識したつもりであったが、学生の意見、また、成績において学生の理解はとても幅が出てしまったと考えられる。

ただ、開始当初から難しく感じてしまう学生が多くいるだろうと予測(であるから、上記様々工夫した)していたが、「説明わかりやすかった」等の肯定的な意見もあり、意図したことが全く功を奏しなかったわけではないとも考えている。

◆今後に向けて

どうしても学生たちの取り組み姿勢、理解力に幅があるのは仕方ないことなので、それらを踏まえて、以下さらに工夫、修正をする予定である。

- ①配布資料のさらなる工夫
- ②授業実施時での重要ポイントの明確化
- ③演習時間をもう少し長くとれるような授業計画
- ④提供する情報量の整理(取得すべき情報がほとんどではあるのだが)

科目名

107.身体障害作業治療学Ⅰ

担当教員

廣渡 洋史

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

30 名

回答率

70.0%

回答者数

21 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

集計結果において、全体的には概ね良好な結果である。自由記述において、「シェーマをかいたり、実際の写真を見れて想像がしやすかったです」や「臨床の実際の現場でどのような評価やリハビリを行っているのかをわかりやすく教えてください、またどのような技術が必要なのかを詳しく教えてください。」という記載は、授業を実施する者の意図に沿う結果となった。また、手のリハビリテーションに興味を持つようになったという回答もあり、一見、複雑そうでとっつきにくい科目ではあるものの、興味を抱くような授業を展開することができた。

◆今後に向けて

本教科の授業回数において、取り扱う疾患数が多いため、重点的に行うものとそれをベースに比較的ポイントのみを説明するものと分けて授業を進めているため、ポイントのみ説明する部分はどうしても学生の授業外での予習と復習が重要となってくる。その点においては、予習・復習の重要性をお伝えしていくことが重要であると再認識した。今後もイメージして理解して知識として定着させるために、資料や模型等の活用方法を常にブラッシュアップしていきたい。

科目名

115.日常生活作業学 I

担当教員

石井 文康、外倉 由之

専攻・配当年次

OT 1年

履修登録者数

32 名

回答率

100.0%

回答者数

32 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

総合3.81であり、概ね良い評価であったと思われる。目的などを意識し、熱心に取り組んでいる学生が多数みられたことは良かった。また、DPに基づく授業到達目標の達成度においても、多数の学生が達成できていたため、良かった点については、今後も継続して実践していきたい。

学生の自由記載からは、教科書だけでなく、ADLに関するドラマなどの視聴覚教材・知識を問うクイズや実際の現場で使用している自助具を紹介し、体験することで学生が興味を持つことにつながったと思われる。また、グループワークもあり、理解しやすかったというコメントからは、参加型学習を導入することで、内容の理解につながったと思われる。

本科目は作業療法士にとって重要な概念である日常生活活動の基礎を作業療法の視点から理解することを目的としており、今年度も学生の理解を深めるため随時演習を用いたことが自由記述に反映されていたため、今後も演習を活用していきたい。

◆今後に向けて

今後も、学生が主体的に参加し、自ら能動的に考えられるような講義を継続していきたい。学生の自由記載からは作業療法士がどのような仕事をしているのか、作業活動の種類などに興味を持つことができた。実際に臨床で使われてる道具を触ってみたことがよかったとのコメントがあるため、今後も教科書だけではなく理解を深められるような教材を適宜使用していきたい。授業の進行については、授業スピードはちょうど良いと記載があるため、授業の進行については今後も同様に継続していきたい。

しかし、事前・事後学習に取り組みやすいようプリントを配布していたが、アンケート結果では学習時間の少なさが明らかとなった。今後はより事前・事後学習の重要性を活かした講義が展開できるよう講義内容を検討していきたい。

科目名

116.日常生活作業学Ⅱ

担当教員

石井 文康、清水 一輝

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

30 名

回答率

73.3%

回答者数

22 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

全項目が3.5以上と高い評価であり、特に「興味」、「進行」、「説明」、「シラバス」は高い評価であった。一方で、「学習到達目標を意識していない」「到達目標を達成できなかった」という回答もみられた。また、事前事後学習を行っていない学生が半数であり、到達目標の意識化や主体的な学習への取り組みは課題であると考えられる。

自由記述では、映像や事例を用いた授業構成に対する肯定的な意見が多くみられた。また、動作分析の書き方や国試対策に対する肯定的な意見もあり、臨床実習や国家試験につながる学習内容が評価されていた。さらに、グループワークを活用したことで理解が深まったとの声も多く、学習意欲の向上に寄与していたと考えられる。

◆今後に向けて

今後は、事例の映像や実技、グループでの事例検討といった実践的な学習方法の良い部分は継続しながら、学習到達目標をより意識化できるような授業になるように工夫していきたい。授業への評価は高い一方で、学習到達目標を達成できていないと感じている学生もいることから、授業の各回で学習する内容と授業の到達目標との関連をより明確に示していきたい。また、事前事後学習を行っていない学生が半数いたことから、学生がより意欲的に学習に取り組めるような、各回の講義内容とつながる自己学習課題についても検討していきたい。グループワークにおいても、全員がグループに積極的に参加できるような環境を整え、学びの質をより高めていきたい。

科目名

117.日常生活作業学実習

担当教員

加藤 真夕美

専攻・配当年次

OT 2年

履修登録者数

30 名

回答率

66.7%

回答者数

20 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

すべての項目で平均が3.65以上であり、バランスの良い評価であった。本講義の工夫としては①学習のガイドとなるようなレジュメを作成すること ②繰り返し実技練習を行い、実技試験でもその都度フィードバックすること ③自身で調べ体験したことを、「自分が実習や臨床で活用できる」レポートとしてまとめさせること の3点である。

質問(9)では93%の学生が授業内外で質問したと回答しており、また意欲(8)と目的意識(10)において「取り組んだ」「どちらかといえば取り組んだ」と回答した学生が100%であり、学生の意欲を引き出すような授業を展開できていたと考えている。自由記載では「介助者と対象者どちらの立場にも立って模擬体験を重ねることでより安心で安全な介助につながられるような学びを得ることができた」「臨床の現場での技術を詳しく教えてくださり、何度も練習の機会もあり技術の習得の機会が豊富にあったのが良かった」「実際に学外の人にインタビューをする経験は緊張したが、学んだことを活かしながら、取り組むことができてよかった」「実習を行いながらだった為、課題が大変ではあったが、実習でとても役に立つ情報を自分なりにまとめる機会があつてすごくよかった」等の記載があり、②③が学習を補足する一助となったと考える。

◆今後に向けて

清須市民げんき大学の卒業生へのインタビュー体験を含め、本講義では臨床実習で確実に活用できる知識や技能の習得を目指している。繰り返し実技練習を行い随時フィードバックすることで最低限の技能を体で覚えさせ、学内で実体験できなかったことはかなり具体的に課題を提示した上で個人レポートを作成させることを繰り返した。限られた時間の中でどの学生もよくやり遂げたと評価している。これらの知識や技術が3年次の臨床実習にどのように活用されるのか、あるいはどのような課題が挙げられるのか、検証していきたいと考える。

科目名	123.地域作業療法学
-----	-------------

担当教員	渡邊 豊明、岩井 和子
------	-------------

専攻・配当年次	OT 2年	履修登録者数	30 名
回答率	60.0%	回答者数	18 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

学生は作業を伴う修得を好み、ほとんどがグループワークについての良好な記述であった。今年度は主担当者の都合にて、代替で教員が急遽担当したため、学生には好評ではあったが、地域支援について、さらに必要な知識の教授が今後必要になると思える。

◆今後に向けて

今後、政策の見直し等も予測されるため、地域での支援の基本や新制度等についても情報を新しくして教授することが必要と考えられる。

次年度は、主担当者の復帰により、さらなる知識・経験についてのより、詳細な情報教授がなされるものとする。

時間割編成上からも、次年度は地域臨床実習に向けて十分な知識教授が必要である。

科目名

126.臨床実習 I（見学）

担当教員

岩井 和子、加賀谷 繁、廣渡 洋史、横山 剛、渡邊 豊明、
加藤 真夕美、清水 一輝、外倉 由之、松田 裕美

専攻・配当年次

OT 1年

履修登録者数

32 名

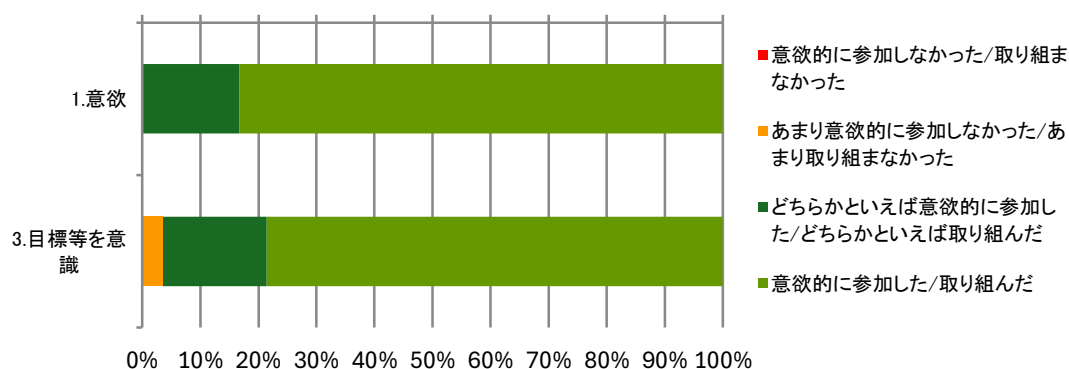
回答率

93.8%

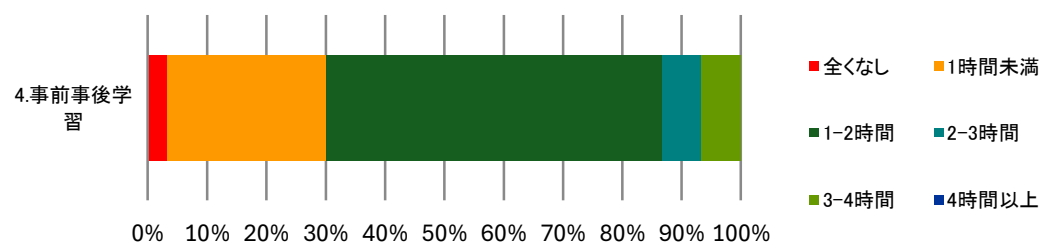
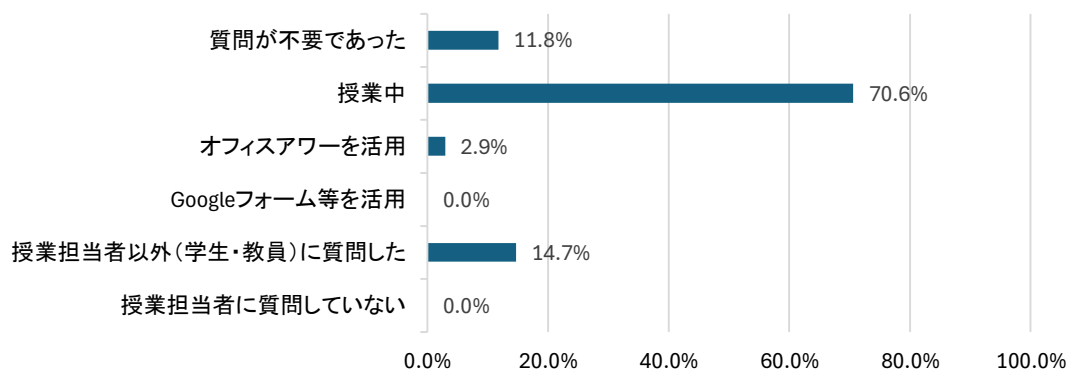
回答者数

30 名

◆集計データ結果について



2.質問

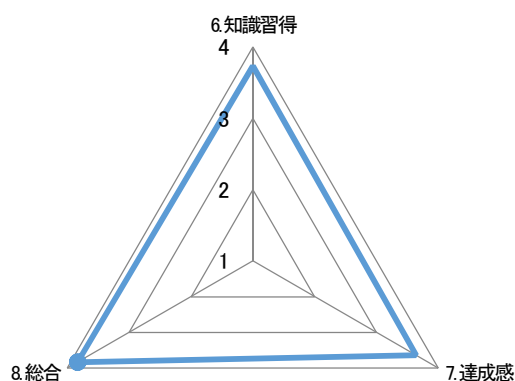


6 学生の満足度(知識習得)

7 学生の満足度(達成感)

8 総合

(軸単位:4段階評点)



科目名

127.臨床実習Ⅱ（地域）

担当教員

岩井 和子、加賀谷 繁、廣渡 洋史、横山 剛、渡邊 豊明、
加藤 真夕美、清水 一輝、外倉 由之、松田 裕美

専攻・配当年次

OT 1年

履修登録者数

30 名

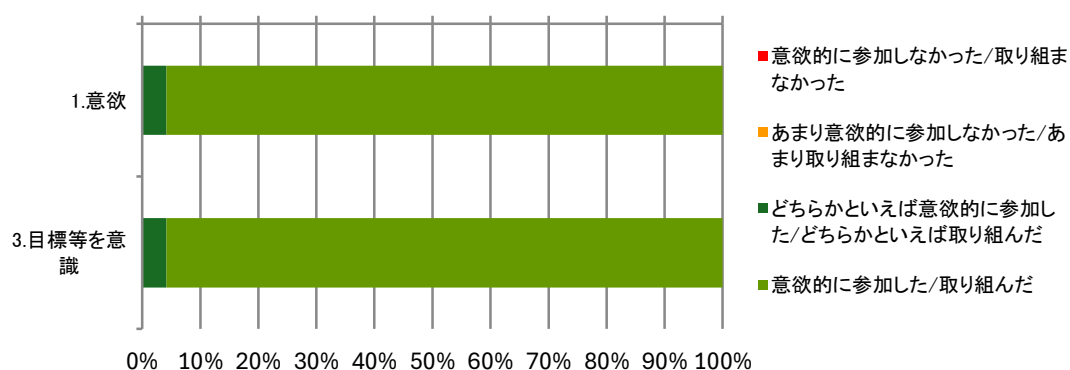
回答率

80.0%

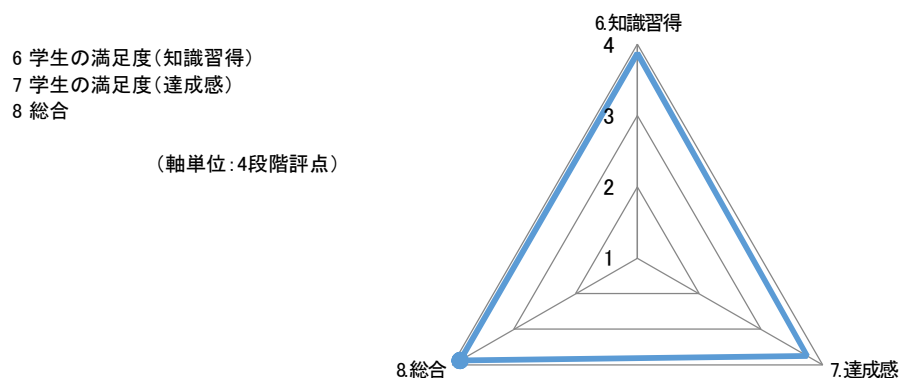
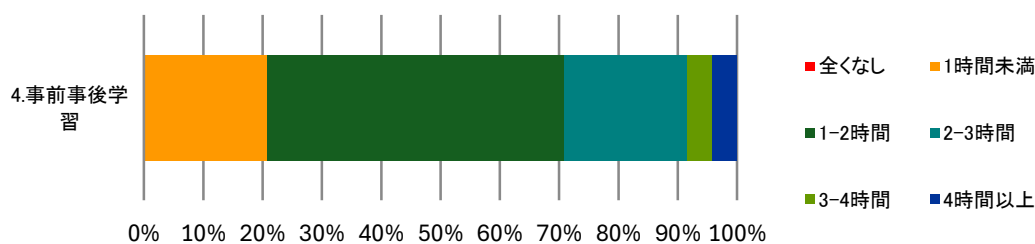
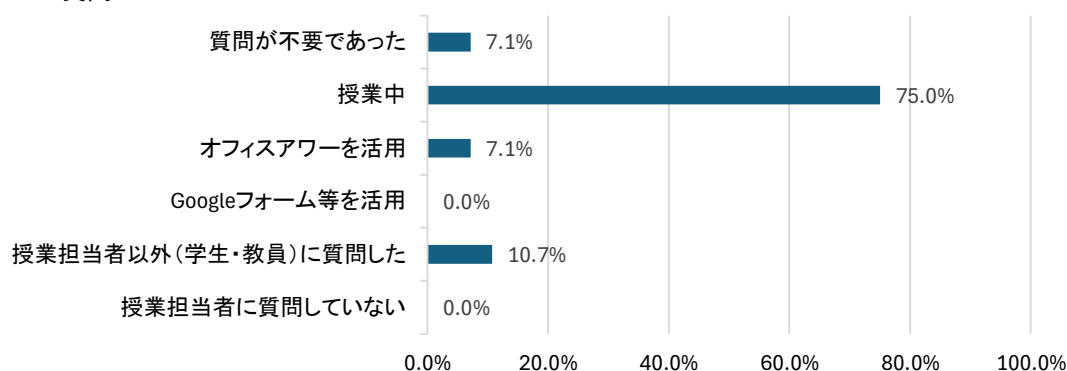
回答者数

24 名

◆集計データ結果について



2.質問



科目名

131.臨床セミナー

担当教員

加藤 真夕美、清水 一輝、外倉 由之

専攻・配当年次

OT 1年

履修登録者数

32 名

回答率

93.8%

回答者数

30 名

◆集計データ、学生の自由記載の内容を検討した結果

すべての設問において平均3.63/4以上の回答であり、バランスの良い評価であった。「10.目標を意識」して取り組んだかには、すべての学生が「取り組んだ」「どちらかといえば取り組んだ」と回答しており、「8.意欲」「14.達成度」と合わせて、多くの学生が、授業の意義を理解して能動的に取り組むことができたようである。

自由記載は「仲間と協力して物事に取り組むことができた点が良かった」「対話をする機会が沢山あったため、コミュニケーション能力を養い、実習に繋げることが出来た」「意欲が掻き立てられた」「作業療法士の解像度が上がった」「作業療法士とは何なのかを考えることが出来た」と、作業療法への理解や学習意欲に良い影響を与えたというコメントが多かった。一方で「もう少し発表がスムーズにできるようになりたい」「社会的常識と礼儀が全くなってなく、反省点が多々あった」「もっと振り返り、具体的に記入、説明できるようにするべきだと思った」と、自己を内省し今後に繋げていこうとするコメントも多く挙げられた。臨床現場との繋がりを意識した授業構成だからこその振り返りであり、教員としても本授業の意義を改めて確信することができた。

◆今後に向けて

本授業は、愛知医科大学病院の見学実習と、臨床実習Ⅰ（見学）前のガイダンス、また両実習後のセミナー（報告会）の大きく3本立てで構成した。いずれも初年次教育としての位置づけであり、かつ臨床教育の一貫である。上記の通り、医療系の初学者たちにとって、夢を実現する第一歩として本授業が位置づけられ、自己内省を伴った振り返りや意欲向上の場となっていた。

まだ手探りの科目であり、良い側面は継続しつつ、反省点を随時改善していきたい。例えば、臨床実習Ⅰとの関連性やすみ分けなどは、今後整理する必要がある。また、両実習中には様々な不測の事態が生じたことも事実であり、事前ガイダンスに何が足りなかったのかを振り返り次年度に備えたいと思う。